
古城に住む悪魔

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古城に住む悪魔

【Zコード】

Z80280

【作者名】

薄明

【あらすじ】

亡き両親の残した古城で、偶然にも悪魔が封印されていた小瓶を割つてしまつたアマーリエは、その悪魔に復讐を宣告される。どうやら、先祖様に封印されてしまつたらしい。先祖のツケを私に払えつて?……悪魔との同居生活は楽ではありません。

現在、加筆修正中。サブタイトルの数字のズレは修正済み箇所と
の目印にしております。見苦しいですがご容赦ください。

私は今お城で暮らしている。

別にお姫様というわけではない。ドレスも着ていないし、扇を片手にうふふと笑って過ごしているわけでもない。服は市販品しかもバーゲン品で、手は一年中荒れている。だからといって召使いというわけでもないのだ。

これでも一応、城主なのだから。

* * * * *

レルヒ家の土地の端、それも山を一つ越えた川沿いの断崖絶壁の上に、朽ち果てた古城があると聞いた。

遺産として引き継ぐまで全く知らなかつた。

子供の頃から聞かされたお伽噺の舞台が、そんな身近にあると誰が思うだろう。まるで夢のようだと思ったのは一瞬のこと。弁護士の口から『相続税』という破壊力のある現実的な言葉を聞くまでは。しかもそれを両親の葬儀の真っ最中に聞かされたのだ。潤んでいた瞳は一瞬にして砂漠と化しても、棺の中にいる両親は文句も言わない。むしろ棺に向かつて文句を言いたい。なぜ死ぬ前に売つてくれなかつたのか、と。

今更死んだ人間に何を言つても仕方がない。ごぶしをハンカチご

と握り締めて涙をのんだ。

葬儀も無事に終わり、遺品の片付けも粗方済んだ頃、城というものをこの田で見てみるべきだと思い立った。

売るとしてもどのような状態なのか。万に一つでも住めるものなら、家賃のかかるアパートなど出て、そこで暮らすのも悪くないかも、という下心もあった。のちに、それがいかに無知で安易な考えだったのか嫌でも思い知ることになるとは、その時は全くもつて予期していなかつた。

町から一つ山を越え　　ない山の中腹に、ほぼ瓦礫と化した状態の城はあつた。

あえて控え田に立つなり、半壊した壁の上にからづじて天井が残つていいといつた状態だ。

いつ崩れてもおかしくない城中に入る勇気は、生憎持ち合わせていない。

窓は当然ガラスもなく、風雨にさらされたカーテンは色が抜けて朽ちた状態でぶら下がっている。石を積み上げて造られた外壁は濃い灰色で、所々に絡んだ薺が長い年月と重々しい雰囲気を醸し出している。

そう、いかにも何かが出てきそうな雰囲気だ。

幼馴染のクルトとアマーリエの仕事先であるパン屋の娘で、先月十歳になつたばかりのアンナと共にピクニックをかねて古城を見に来ていたのだが……。

「うわあ、ホントにお城がある」

アマーリエたちが住んでいる町シリングスの住民も、一体どれほ

どの人気がこの山に城があること知つていいのだろうか。

感嘆の声を上げたアンナの手を握り、とりあえず城の周囲を一周してみようと提案した。

「図書館でちよつと調べてきたんだけど、この城が建てられたのは十三世紀ぐらいよ?」

先頭を行くクルトが大学生らしいことを言つ。

「十三世紀って、今から八百年ぐらい前ってこと?」

足場は崩れた外壁の残骸や、人の手が入っていない庭には草どころか木まで生えている。アンナを気づかいながら歩くアマーリエ工を、何度も振り返りながらゆっくりと歩を進めていくクルトに尋ねた。

「そうなるね。で、実際に人が住んでいたのは十八世紀ぐらいまでらしいけど」

「つてことは、人がいなくなつてから、かなり経つってことよね」「三百年ぐらいか、とざつと計算する。

「いや、僕もここにくるまではそう思つていたんだけど、ちよつと違うかも」

クルトの声に、顔を上げた。

「どういうこと?」

「確かに崩れてはいるけど、それだともつと庭に木が生えていてもいいと思わない? だけど実際生えているのは細い木ばかりだし、多分誰かがある程度の手入れをしてたんじゃないかな?」

言われてみれば、確かに城自体は崩れているが城壁に囲まれた庭は、城壁の外と比べると格段と生えている木の数が少ない。それに城までの道が完全に無くなつていなかつたようにも思える。季節的にも枯葉が地面を覆う時期である為、草木の茂りが悪いということもあって、この城までの道を見つけるのは思いのほか容易だつた。それは誰かがここに来ていたということではないだろうか。

そう考へるとクルトの言つことは一理ある。

「じゃ、誰がそんなことをしてたの?」

アンナと顔を見あわせて呟くと、クルトは溜息を零しながら言つ

た。

「ここは地主なんじゃない?」

「え? 地主なんていたの?」

真顔で尋ねると、手を軽く引つ張られる。アンナを見下ろすと、にっこりと笑みを返された。

「マーレお姉ちゃんでしょう?」

「あ、そっか」

頷いたものの、アマーリエはこんな場所に来たことは断じてない。と言つことは、両親も知らなかつた可能性が高い。ならば祖父母はどうだろう。

彼らは父親が幼少の頃亡くなつたと聞いている。そうとするべく、この城のことが上手く伝わらなかつたと考えればいいのか。祖父母がかつて手入れをしていたのだとすると、確かにこれぐらいの荒れようになるのかもしれない。

「でもさ、なんでレルヒ家にこの城が引き継がれて来たんだろうね」「あ、それは私も思つた。えつと何だけ? シュヴァルツ城だつたつけ?」

クルトの説明を思い出し、城の名を口にする。

この城は、この辺りを治めていた領主の城だつたらしい。シュヴァルツ城といふのは別名で、本来の城の名前はメレディス城と言つ。単にメレディス家が住んでいたからだ。

幾世代にも渡つて治めていたメレディス家は十八世紀、断絶した。その後、誰もこの城に住む者はおらず、荒れていつたといふ。

「レルヒ家なんて一般庶民でしょ? 山一つ持つていたことにも驚きなんだけど」

不意に湧いた遺産に戸惑わなかつたわけではない。呟くのと、アンナが転びそつになつて手を引っ張られたのは同時だつた。

慌てて手を引っ張つた瞬間、田の端で前を歩いていたクルトが叫び声を上げて姿を消した。

正確には、地面が陥没してその穴に落ちたのだ。

「ちょっと、クルト！」

「お兄ちゃん！」

慌てて駆け寄ろうとしたアンナを、とりあえず引き止め、絶対に穴に近づかないように言い含める。

恐る恐る穴に近づき中を覗き込むと、意外にも深さはなく、人の背丈よりも少しだけあるぐらいの人工的な空間が広がっていた。

「クルト！ 大丈夫？ 怪我は？」

「ん、大丈夫」

土埃を払いながら周囲を見渡し、クルトは一瞬ボカソとした表情を浮かべた。

「ここは、ワインセラーか？」

「もしかして年代物のワインでも見つかった！？」

売れば相続税の足しになるかも、と勝手に頭の中で計算する。

少なくとも三百年は人の手が入っていなかつたのだから、三百年前のワインということになる。ネットでオークションにでもかければ、いい値がつくのではないかだろうか。

思わずその穴の中に飛び降りる。

「マーレお姉ちゃん！」

上から不安そうなアンナの声が聞こえ、しまった、と思つ。

「大丈夫よ。アンナもおいで」

一人で残しておくよりは一緒にの方がいいかもしれないと外に向かつて声をかけた。

しかし良く考えてみれば、天井が抜けようの場所なのだ。穴の中に三人で生き埋めになる可能性の方が高いことに遅まきながら気づく。アンナに手を貸しながらクルトを見ると、明らかに呆れた顔をしていた。

「とりあえず、そこから動かない方がいいと思うよ

少なくとも天井はすでに崩れているのだ。生き埋めになる確率は低いはず。素直に頷いて再びアンナの手を握った。

「すごいね。ここ隠し部屋かな？」

アンナは大きな田をさりに大きくして、クルトが向かっている奥に田を凝らしている。

奥は薄暗く、頭上から入り込んでくる陽光で埃が舞つている。クルトが言つようにしていて、もともとは貯蔵庫か何かだつたのだろう。空気はひんやりとしていて、湿度もあるようだ。かつては積み重ねてあつただろう木箱が腐つて床に散乱していた。

「奥に出入り口がある。ちょっと見てくるからそこにいて」

あまり大きな声を出して崩れではないかと思つたのだろう。アマーリエもそれには無言で手を振つて応えた。

「ちょっとした冒険だね」

アンナを見下ろしてウインクすると、アンナも楽しげに頷く。

「楽しいね」

そう言つてもらえると誘つた甲斐があるといつもの。

手をぶらぶらさせながら顔を見合させてHへへと笑つていると、

奥からクルトが戻つて来た。

「行けそうだけど、どうする？ そこから一度外に出て、外からの入り口を探す？ それともこのまま行つてみる？」

危険なことはアンナがいるから避けたかったが、そのアンナが手を引っ張つて先を促してきた。

「ね。行こうよ」

「うーん、……だね。よし！ 行こう！」

アンナのキラキラした眼差しを受け止め、迷いは消える。アマーイエだって本当は行つてみたかったのだ。

「じゃ、静かに行こうね。足元も気を付けてね」

ぎゅっと手を握ると、子供らしい柔らかな手に握り返される。

「うん」

真剣な顔で返事をしたアンナを見たあと、クルトを見やる。諦めたような顔で笑うクルトを見ながら一歩を踏み出した。

豪華だが決して下品な派手さではない部屋のソファに、アマーリ工は気づくと横になつていた。

見上げた天井は高く、ぶら下がつたシャンデリアは年代物のようだが、灯した蠟燭の明かりが乱反射するよつてぶら下げられたガラスに曇りはない。

自分の身体の下にあるソファも布張りだが手触りは極上で、さあれ立つた手が布を傷つけてしまわなかと心配になつてすぐに手を離す。

「……ん？ ここはどう？」

ソファから身を起こし、まだ窓の外に陽光があることから日中だと言つことは分かる。

だが、一体今まで自分は何をしていたのかと思案する。床に足を付けると、ふかふかの絨毯が靴下を履いた足に触れた。見ると、ソファのすぐ側にくたびれて汚れた見覚えのあるスニーカーが揃えて置いてあつた。

一瞬、靴を履くべきか迷つた。

スニーカーはひどく汚れていて絨毯を汚してしまつかもしれない。そうなつては簡単に弁償できるものではない。大体、相続税も払う算段がまだついていないというのに。

そこで、ハツとする。

「そうよ！」

叫んだあと、額に手を当てて記憶をたどる。

先程まで、シュヴァルツ城の地下にいたはずだった。

クルトを先頭に、アンナの手を引きながら貯蔵庫から出て通路らしき場所を歩いていた。

外に上がる階段も見つけ、取りあえず出ようといつになつたのだが、その階段脇にもう一室、部屋があつたのだ。

物置か何かだらうと思いつつ、気になつて部屋を覗いてみたが、そこはかなり狭い小部屋で礼拝堂のような場所だつた。

埃をかぶつた床やクモの巣がかかつた天井は低く、クルトにアンナを預けると、ゆっくりと足を踏み入れた。

何もないガランとした空間だが、礼拝堂と言いかれない不気味さがどこか漂つている。そう、礼拝堂は本来地上にあるべきもので、地下にあるものではない。だとしたら、ここは何なのだろう。

「ね、クルト。ここって……」

嫌な汗と奇妙な寒気が背筋を伝い、古い空気が余計にでも息苦しく感じる。

「出よつ」

アンナがいるからか、はつきりと口にしなかつたが、おそらく考へていることはアマーリエもクルトも変わらない。二人の表情に何かを感じ取つたのか、アンナは今にも泣き出しそうな顔をしている。出口に向かうアマーリエは焦つていた。その為、足元にまで気が回りきらなかつた。

靴先に感じた衝撃と、壁にぶつかつて何かが割れた音で、視界の端に見えていた瓶を思い切り蹴飛ばしたことに気づいた。

妙に音が反響する。

その音に驚いたように、アンナとクルトの背中がビクッと震えたのが見えた。

「え？」

それを最後に、アマーリエの視界は閉ざされた。

そう、完全に閉ざされたのだ。落ちてきた天井によつて。

アマーリエが蹴飛ばした瓶の衝撃が、壁を伝わつて天井が崩れてしまつたはずだつた。

「なんで生きてるの？ アンナとクルトは？」

思わず自分の身体を抱きしめる。着ている服は先ほどと変わらないが、大量に土砂をかぶったにしては汚れていない。そつと頭に手をやるも、髪にも土が絡んだ形跡はない。

誰かが助けてくれたのだろうか。だがそれは有り得ない。

城を見に行くことを知っているのは、多分アンナの母親ぐらいだ。土砂に埋まっているアマーリエを助けることなど早々出来る筈はない。その間に死んでしまうはずだ。

では、天井が崩れたと思ったのが記憶違いなのだろうか。靴を履かずに扉へと向かう。アンティーク調のドアノブを掴んで開けようとしたら、思いのほか軽く扉は開いた。

「あ、気づいたのですね」

そこには綺麗な銀髪の少年がいた。肩で切りそろえられた髪は見事にまっすぐで、整った顔立ちを彩るその瞳は黒。人懐っこい笑みを浮かべて、手にはトレイに載せにこりとほほ笑む。服もアマーリエにしてはよそゆきになりそうなほど上質な、でもどこかクラシックな感じの服を着ている。

「あなたは？」

「僕はヨハン。お姉さんは？」

いつまでも入り口を塞いでいるわけにもいかないでの身を引くと、つかつかと入ってきながらヨハンに尋ねられた。

アマーリエは身の置き場に困り、その場に立ちつくしてしまった。

「アマーリエよ。あのね……ここはどー?」

「僕のご主人さまの屋敷ですよ」

ヨハンは先程までアマーリエが横になっていたソファの側に置かれたテーブルの上にトレイを置くと、用意してきた茶器に手際良くお茶を入れる。カップから立ち上る湯気と香りに思わずふらりと近づいた。

「あの、私と一緒にいた人たちを知らない？」

こんな子供にご主人さまと呼ばすなんて、と思いつつその人物の

ことは取りあえず横に置き、気になつていていたことを尋ねてみる。手でソファに座るようになつて、ヨハンも自分用にお茶を入れると向かいのソファに座つた。

「女の子と男の人のこと?」

猫舌なのか、カップの中に息を吹き込みながら、ちらりちらりを見る。

「うん」

どうやらヨハンは彼らの行方を知つてゐるようだ。思わず身を乗り出すると、ヨハンは可愛らしく首を傾げた。

「旦那さんと娘さん?」

「えつ、まさか! 違うよ。仕事先の娘さんと幼馴染だよ」

思つてもみなかつた返しに、思わず声を大にして否定する。ヨハンはその声に驚いたらしく、カップを揺らして身を引いた。

それは思いのほか勢いがあつたらしく、カップの中からお茶が零れた。

「あつい!」

ヨハンはすぐにカップを皿に戻し、立ち上がり膝の上に落ちたしづくを払う。

「ごめん! 大丈夫?」

アマーリエも自分の声が原因でヨハンに火傷を負わしたとなると、彼の言う「ご主人さまに申し訳がない。しかもお茶まで入れてもらつたのだ。

「冷やさなくつちや」

「……大丈夫。もうあつくないよ」

先ほどまで綺麗な顔を歪めて泣きそつになつていたのに、アマーリエが側に駆け寄つた時には、すでにケロリとした顔をしてニコリと笑つて見せた。

「嘘! 大丈夫じゃないでしょ? 早く冷やさないと跡が残つちゃう」

ヨハンの側にしゃがみこみ、零れたお茶で濡れたズボンを見たが、

あら、と首を傾げた。視線を上にあげるとヨハンと田中が会つ。

「大丈夫ですよ。……あ、ご主人さまがいらっしゃる」

慌てたように扉に向かうその姿は不自然で、アマーリエはヨハンのズボンにお茶の染みが無かつたことを訝しみ、思わず眉間に皺を寄せた。

確かにお茶は零れたはずだ。それは目の前で見たのだ。だがヨハンのズボンは濡れではおらず、ヨハンも大丈夫だといつ。

先ほどからおかしなことばかりが続く。もしかしてこれは夢なのだろうかと思わずアマーリエは自らの頬をつねつた。

「何をしているんだ、おまえは」

床にしゃがみこみ、眉間に皺を寄せ頬をつねつたまま、アマーリエは声のした方を見上げた。

そして、やはりこれは夢なのではないだらうかと思つた。

ヨハンがご主人さまと言つた人物は、二十代半ばぐらいの青年だった。窓から差し込むかすかな陽光は、その髪に触れればきらきらと眩いばかりの輝きとなり、顔はどんな彫像さえその迫力には負けてしまうほど整っていた。きつく見える目元は彫像にはない生氣を感じさせ、一方チョコレート色の瞳が柔らかさに変えている。

なんて絶妙なバランス。

アマーリエは心の中で喝采を上げたが、自分のまぬけな状態をどうやつて脱しようかと考えると、ますます眉間に皺が寄る。

「おい？ ……ヨハン、こいつは頭でも打つたのか？」

「いえ、先ほどまで普通に話していましたよ」

「ではなんだ、この態度は。人の顔を見て眉間に皺を寄せるとはいい度胸だと思わないか？」

どこまでもヨハンに話しかけているが、視線はアマーリエを上から見下ろしている。否、見下している。

「アマーリエさん」

あまりにも固まつたまま動けないアマーリエに救いを差し伸べてくれたのは、やはりヨハンだった。

ヨハンに声をかけられて、すぐに手は頬を離れた。視線をヨハンに移動させると眉間の皺も消える。

「本当に火傷は大丈夫なの？」

「ええ。それよりもアマーリエさん」

社会人としての失態から逃げ出したかつたアマーリエだが、それはヨハンが許さないようだつた。彼の視線が青年へと向かう。

アマーリエは仕方なく立ち上がると、再び視線をヨハンの横に立つ青年へと向けた。

青年に不機嫌そうに見つめられ、肩身が狭くなる。自覚があるだけなおさらだ。

「アルトリートだ」

ただ一言、青年は不機嫌そうな顔で不機嫌そうに言い、不機嫌そうにソファにふんぞり返つた。

「アマーリエ・レルヒです。あの……」

失礼な態度を謝ろうかと思ったが、目の前の青年の態度も鼻についたので謝罪は取りあえず後回しにする。しかし先ほど、ヨハンに聞いて結局は何も答えをもらっていない質問を再度ぶつけてみようと思い立つ。だが、青年は視線だけをこちらに向けると、アマーリエの言葉を遮つた。

「レルヒ？ おまえはメレディスではないのか？」

「いえ。レルヒです」

「……おかしいな。おまえからはメレディスの血の匂いがしたんだが」

考えるように顎に手を当て、ぶつぶつと何か不思議なことを呟いている。その姿もさまになつていて、思わず視線が釘付けになる。

白いシャツに黒いズボン。ヨハン同様クラシックな雰囲気を匂わす格好だが、アルトリートには不思議と違和感がない。見た目がよければ、どんな服を着ても似合つのか。

一方、アマーリエは自分の服装が、いかに目の前の人からかけ離れた姿なのか思い知る。先ほど、アルトリートにみくだされたの

は、単にアマーリエの態度が悪かつただけではなく、着ているものがいかにも貪りぐさかつたからかもしれない。

視線だけが再び向けられ、無遠慮に見つめていた為、視線がぶつかり合う。

「なんだ？」

言いたいことがあるなら言えと、その表情は言っている。

先ほど、アマーリエの言葉を遮ったのは誰だつたかしらと思いつながら、やつと聞きたいことを口にする。

「私と一緒にいた人たちどこにいるの？」

「ああ……。隣の部屋で眠つている」

「様子を見てきても？」

一人の所在を聞くと、いてもたつてもいられず返事も待たずに立ち上がつた。身体は扉へと向き、まさか否という返事はあるまいと勝手に思いながら足は動く。

しかし。

「話はまだ済んでいない」

把手に手をかけた時、アルトリートは言い放つた。

その自己中心的な言い方に思わずカチンときて振り返ると、ヨハンがハラハラした様子でこちらを見ていた。

だが、アマーリエは止めなかつた。

「アルトリートさん」

つい口調が強くなる。

「なんだ？」

「休ませていただきて感謝します。またお礼に伺いますので今日はこれで失礼させていただきます」

一体、何がどうなつてこの屋敷にいたのか、アマーリエにはさつぱり理解できなかつた。だが、ここで目覚めたということは彼らに何らかの迷惑をかけたのだろう。それなら後日、もう一度状況を理解するためにも来なければならない。アルトリートがまだ何か話したいというならば、その時でもいいはずである。今は、預かつてい

る子供のアンナもいるのだ。怪我がないか一時も早くこの田で確かめたかつた。

だが次の瞬間、アマーリーHは田を見張った。

「話はまだだと言つたはずだ、『アマーリーH』」「名前を呼ばれた瞬間、この部屋から出ていく気満々だったアマーリーHの身体は身動き一つ出来なくなつた。驚きに田を見張ろうにも瞬き一つできず、指一本動かせない。声を出さうとしても舌をえぐれない。

「こちらにきて座れ

アルトリートが目の前のソファを指差すと、アマーリーHの身体は意識に反してそちらへと向かう。

一体、何が起こつたのか分からぬままソファに腰かけると、やつと身体は意識と呼応する。

息を深く吸い込むと、田の前の男を警戒も露わに睨みつけた。

「……今のは何？」

アルトリートは尊大な態度のままだつたが、先ほどの不機嫌さは薄れていた。その綺麗な顔を皮肉げに歪め、笑みを浮かべてゐる。「名前で縛つただけだ」

「何なのよ、それは！」

眠つてゐる間に、催眠術でもかけたと言つのだらうか。頭のどんかで警鐘が鳴る。聞いてはならないことを聞いてゐるような気がする。

アルトリートの機嫌が良くなる一方、アマーリーHの気分は悪くなる。

「メレディスの血をひく人間なら、俺の言つことを聞く契約だからな」

言われている意味はよく分からなかつたが、内容はアマーリーHにとって良くないものであるということぐらい何となく理解できた。そしてそれが常識に当てはまらないといつとも。

「だからあなたは何なのよ！」

足元から這い上がる恐怖に、堪らず悲鳴に近い声を上げる。

その様子にアルトリートは満足そうに手を細めると、口元に笑みを刷いた。それはどこまで怜俐で、冷酷で、残忍に見えて、アマーリーの呼吸は思わず止まる。

「人間の言つてこの『悪魔』といつやつせ」

この「時世に『悪魔』を信じろと言われても信じる方がどうかしている。

人は篐のかわりに飛行機で空を飛びし、魔術を使わずともスイッチ一つで明かりを点けることが出来る。遠く離れた友人にも手紙を書かずとも携帯電話一つで数秒後には会話をすることも可能だ。アマーリエがいくら信じないと言つたところで、屋敷の外に連れ出された瞬間、信じないわけにはいかなかつた。

外觀こそ変わりはすれ、そこはシユヴァルツ城の敷地内で、かつてはこのようは外觀をしていたことを知らされた。つまり、崩れていたはずの城が完全に復旧されていたのだ。

石を積み上げられた城壁に、色鮮やかなカーテン。玄関があつただろう場所には流麗なレリーフで飾られた木製の扉。その扉もアマーリエの身長の一倍はありそうな程高く、幅もアパートの玄関の扉の三倍はありそうだった。

再び部屋に戻つて来たアマーリエは呆然としたまま、アルトリートやヨハンが語つた内容を聞かされていた。

詳しいことは理解できなかつたが、大雑把にまとめるとアルトリートはかつてメレディス家の人間に呼び出され、メレディス家の治める領地の繁栄を約束させられたらし。だが、ある時そのメレディス家の人間によつて封じられてしまい、数百年という長い間、瓶に閉じ込められてしまった。その瓶というのが、アマーリエが地下で蹴つた瓶で、しかもあの瓶はメレディス家の血を引く者でないと開けられないようになつていて、不運にもアマーリエが開けてしまつたというのだ。

先ほどと寸分違わず同じ位置に座つてふんぞり返つているアルト

リートは楽しげに告げる。

「おまえを埋まつた地下から助けたのは復讐するためだ」

言われてアマーリエは首を傾げた。

「私はあなたに恨まれるようなことをした覚えはないのですけど？」

良く考えれば、おかしな話である。

封じ込められた人間は大昔に死んでいるのだ。メレディス家がいくら断絶したといつても、細々とこうして生き延びていた子孫はいたわけで、封じ込められた人間を恨んでいふとはいへ、その子孫に復讐しようなどお門違いもいいところだ。第一、復讐の為とはいえ死にかけていた人間を助けたりするものだろうか。それでは完全に人助けだ。悪魔のすることではない。

まるでアマーリエの心の中を読んだようにアルトリートは言い放つた。

「お前が直系のメレディスなのだから、他の子孫を探すのも面倒なだけだ。だからやつの代わりだ」

直系という言葉に、この城のある土地を引き継いだことを思い出す。ついでに相続税のことも。

突如として現実的なことを思い出し苦笑を作る。それをどう勘違いしたのか、アルトリートは身を乗り出すよつこして、さうにアマーリエに衝撃を与えた。

「というわけで、おまえは今田からここに住むんだ。簡単に死ねると思うなよ。充分いたぶつてやるから覚悟しておくんだな」

悪魔に恨まれるほどの所業をしたご先祖様を恨みたいのはアマーリエである。第一、見知らぬご先祖様のツケを払う義理はない。

「そんなの時効よ。何百年前の話をしてものよ」

「昨日のことだろう」

「つ馬鹿言わないでよ！」

確かにここに住めばアパート代はかかるないかも、と考えていたことは認めるが、どこまでも中世の造りをしている建物に住めるほどアマーリエは不便さに慣れていない。というか、絶対に無理だ。

電気のない生活なんて。

「ここに住まないのなら、隣の部屋にいる一人がどうなつてもいいのか？」

悪びれもせぬ言われ、アマーリエは堪らずソファから立ち上がる。「つていうか、ここは私の土地よ！ 勝手に決めないでよ！」

「おまえは俺に逆らえない」

勝ち誇った顔で、しかも鼻先で笑われ、先ほどの意識外の身体の動きを思い出し血の気が引く。

さらに自分の言つた言葉が自らに追い打ちをかけたことに気づき、責めながら力なく首を横に振つた。

この土地の相続税さえ払えないアマーリエに、自分の土地だと言える資格はない。

「あなたには逆らえないかもしれないけど、この土地の相続税が払えなかつたらここを売らないといけなくなるわ」

つまりアルトリートの住むところはないのだ。最悪、アマーリエのいる狭いアパートに来る可能性が高くなる。いや、絶対ついてくるだろう。そうなると、「近所さんの目が痛すぎる。親が亡くなつたばかりの若い独身の女が、男を連れ込むなんて噂されればアマーリエは確実にお嫁にいけない。

売る、の言葉に反応したアルトリートは、嫌そうな顔をした。

「税？ 金がないのか？ いつのまにメレディス家は貧乏になつたんだ……。まあ仕方ない。だつたら、そこらに転がつているものを売ればいい。住むところが無くなるのは都合が悪い」

悪魔に都合が悪いことなどあるのだろうか。悪くなるとするなら、それはきっと復讐に差し触りが出るからに違いない。

だが、確かこの部屋にある装飾品は全て品の良いものばかりだ。きっと売れば高く売れるに違いない。

本物の悪魔の囁きはアマーリエの心の隙を上手い具合につき、どこまでも甘く、アマーリエは相続税の支払いに向とか日途がつきそうで知らずにやけてしまつた。

それを不思議なものでも見るより、ハンが見ていたことを気づきもしなかつた。

しかしアーリーの非日常は幕を開けた。

アマーリエのシュヴァルツ城での生活が始まった。
一言で言つなら、不便。それ以外に言つことはない。

「電氣！ 電氣を引いて！」

アマーリエの再三のお願いを無視しまくつてゐるのは、ちやつか
り城主っぽく振る舞つてゐるアルトリートである。

「俺は別に必要じやない。それにおまえが困つてゐるのであれば、
それもまた都合がいい」

大きな書斎と立派な椅子。オットマンに磨かれた靴を乗せてくつ
ろいでいるのは、輝かんばかりの濃金髪ダークブロンドとチョコレート色の瞳をし
た悪魔だ。

多少、最近の服装を取り入れ始めたアルトリートは、今日も仕立てのいい白いシャツに黒いズボン。最初に会つた日とどこが違うのかとアマーリエは思つたのだが、アルトリートの中では何がが違うらしい。

どうだと聞かれた時には、思い切り頭を傾げてしまった。

彼の手には、アマーリエが仕事に行つたついでに町で買つてきた雑誌が開かれている。どうやらそれを参考にして服装を整えているようなのだが、はつきり言つて彼は何を着ても似合つのだ。決して褒めるつもりはないのだが、事実なのだからしようがない。

「あなたは悪魔だから夜目がきくのかもしれないけど、私には見えないのよ。この部屋に来るまでに何度も転んだと思つてゐるの？ 階段から落ちてもいいの？」

「おまえが怪我をしようが知つたことではないが？」

視線は雑誌に注がれたまま、気のない返事が返つてくる。

アマーリエは頬を膨らますと、腰に手を当て一気に言い放つた。

「そうね。じゃあ私が死んでも構わないわけね？打ちどころが悪ければあなたに復讐する暇を与えず死んでしまえるというわけだわ」鼻で笑つて言うと、アルトリーントの瞳がやつとこちらを向いた。

「おまえは馬鹿か？燭台があるだろ？…………いや、懐中電灯と言つたか。あの便利な代物があるじゃないか」

わざわざ暗闇の中、文句を言いに来るのは結構なことだと、と続けれ、アマーリエは不覚にもすっかりその存在を忘れていた。まさか悪魔にそれを指摘されるとは。

だが、ここで負けるわけにはいかないのだ。

ぐつと握りしめた拳に力を入れると、ようやく合つた瞳を睨む。「でも部屋が暗いのよ。今時の人間は夜が遅いの。夜明けと共に働くような昔の人間とは違うのよ」

「メレディスが起きるのは毎前だつたな」

昔の貴族は一体どんな生活をしていたというのだろうか。というよりも、今は貴族でなく、ただの庶民。規則正しく生活しているのだ。夜明けと共に、はさすがに働かないが、何の楽しみもなく働いているわけではない。せめて夜ぐらいは自分の時間に使いたいものだ。

ムツとしたまま目の前の悪魔を見ていると、アルトリーントは雑誌を閉じ、ニヤリと笑いながらこちらを見上げた。

「なにかと引き換えなら、電気とやらを引いてやってもいいぞ」「なにかつて……」

「俺は『悪魔』だからな。取引が条件だ」「

提示された言葉は、かなりの譲歩なのかもしけないが、アマーリエにとつて取引する『なにか』はないのだ。

財産もなければ才能もない。果たしてアルトリーントの満足する『なにか』を持つているのだろうか。

「……例えば？」

「おまえには復讐しなければならないから命を貰うわけにはいかないか……。だとするとそれ以外だな。死なない程度というと……目

「一つでどうだ？琥珀の瞳は珍しいからな」

何だつたら今すぐ抉つてやうつか、とアルトリーントは真顔で言つてく。アマーリエはすかせり歩ほど後ずさつた。

「ば、馬鹿言わないでよ」

「そうか？ 田一つぐらいで電気を引いてやうなんて親切な悪魔は俺ぐらいなもんだけだな」

もう言つて、もうこの話したに興味が失せたのか、椅子に身を沈める。

「とにかく、何かと引き換えた。引き換えてもいいものが決まったら言へ。考えてやる」

もう話すことはないと田を閉じた悪魔をしばらく眺め、これ以上は無理か、と諦めると仕方なく書斎を後にした。

書斎から出ると、燭台に明かりと灯したヨハンが廊下に佇んでいた。

「部屋まで」一緒にします

「」「リと笑う銀髪の少年に、アマーリエは頬が緩む。

「本当にあなた」は優しいわね

「誰と比べているんですか？」

分かりきっていることを聞かれ、声を出して笑う。

ここでの生活の補佐をしているのはヨハン一人だ。洗濯から掃除、食事の支度まで全て彼がやっている。

一度、アマーリエも手伝おうとしたのだが、あまりにも初步的なことさえ出来ずに、結局は邪魔をしていることに気づいてからは手を出すのを止めおいた。食作るのに、かまどの薪一つ、火が点けられないのだ。ヨハンはアルトリーントの使い魔であるため、指一つで薪に火をつける。それを田の当たりにすれば、結局は足手まといでしかないと気づかれる。掃除をしようとも掃除機がないのだ。とこうか、掃除機を動かす電気がない。

散々な目にあつてからは、田中はパン屋に働きに出ている方が自分の精神が健康的に保てることに気づいた。

隣を歩いている少年を見下ろす。

パツと見た目は普通の少年に見える。使い魔とはどんなもののかよく分からぬが、アルトリートは決してヨハンを邪険に扱つてはいぬ。むしろ二人の関係はただの主人と使用人にしか見えない。「あなたも電気があつた方が便利だと思わない?」

「……電気というもののない生活に慣れてますから。むしろ電気があるとどう便利なのか分からぬ」

その返答に、もしかしたらアルトリートもそういうのかもしれないと考える。

ならばその便利さを知つてもらう方が早いかもしれない。

「それなら、ヨハンも町に行つてみましょう? きっと珍しいものがたくさんあるわ」

我ながらいい提案だと思った。

だがヨハンは遠慮氣味に、でも、とこぼす。上目づかいにこちらを見ているその様子から、ヨハンが町に興味がないわけではないことが窺えて、余計にでも嬉しくなる。

「ご主人さまに聞いてみないと……」

「だつたら、もしアルトリートがいいつて言つたら、今度、私が休みの日に遊びに行きましょう? おいしいものいっぱいこちそうしちやう」

良く考えれば、最近食卓に上つてくる食事は、固い黒パンに野菜の煮込み料理が主だ。ヨハンの作る料理が決してまずいというわけではないが、料理の種類を知らないのではないだらうか。それならば、色々と目で見て味わつてみるのも一つの手だ。

それにアパートを引き払つた為、給料はすべて手元に残る。相続税の支払いも済んでいるので、今のところ借金もない。

貯金が出来る身分になったのは人生初だ。

そう話しているうちにアーリエの部屋についた。

「約束ね」

ヨハンから燭台を受け取り、部屋の前で別れる。ヨハンは使い魔だから暗闇でも明かりは必要ないのだ。

ヨハンが頷くのを見届けてから、アマーリエは上機嫌で扉を閉めた。

アマーリエの住んでいる町はシリングスという。かつては交通の主流だったシリン川の川沿いに発達した町だ。メレディス家も当時、川で荷を運ぶ船から通行税を取っていたらしい。というのも、なぜか隣を歩くアルトリートから聞いた話だ。

太陽の光に輝く濃金髪は、これ以上ないというぐらいた立つていた。しかもその顔立ちは、こんな田舎町では見かけないほどの極上の部類に入る。体形もスラリとしていて高く、それでいて細すぎない。見たわけではないが、きっと無駄な贅肉など付いていないに違いない。なにせ悪魔なのだから。

「どうしてあなたまで付いてくるの……」

苦々しく吐き出したアマーリエに、それは嬉しそうに笑つて見せたのはヨハンの隣に立つアルトリートだ。その笑顔はどこか含みがあるように見えるのは勘ぐりすぎだろうか。

「おもしろそうだから？」

絶対に違うと言い切れる。アマーリエを困らすために違いない。

天気がいいため川沿いにあるカフェは皆、店の外にテーブルを並べていた。冬も間近に迫った秋晴れの休日は、それなりに人出があるようだ、昼食を軽く取るつもりでそのテーブルの一つについたのだが、その一箇所がなぜだか異様に視線を浴びているのは絶対に、目の前に座る悪魔のせいに違いない。

時折吹く風が濃金の髪をさらり、長すぎるのではないかといふ足を無造作に組んで座る姿は、雑誌の中のモデルのようだ。無意識なのか意識してなのか、口元に緩く描く弧は魅惑的で、女性のみなら

ず往来の老若男女は皆視線を送る。

本当なら口ハンと一人で穏やかな休日になるはずだったのに、と今更考えても仕方のないことを考えてしまつ。

隣の席に座つた若い女性たちが、無遠慮にアルトリートを見ては小声で何か話している。そして、チラリとこちらを見てはまた何かを囁いている。

聞こえずとも彼女達の表情を見れば、簡単にその内容は想像できる。アルトリートに対するのは、賞賛の言葉であることに違いない。そしてその連れであるアマーリエには羨望と嫉妬を孕んだ眼差しが添えられている。

代わるものなら代わつて差し上げたいのですけど、と心中で咳き、サンドイッチにかぶりつく。野菜とコショウのきいたハム、チーズが挟んであるだけのサンドイッチだが、パン自体にもうつすらと塩味がきいていておいしい。この店はアマーリエの勤めているパン屋がパンを卸しているのだ。美味しいはずがない。

「このパンは……」

驚いた顔をしてそう言つたまま、じつとパンを見つめているアルトリートに、アマーリエは思わず自慢する。

「美味しいでしよう？ 私の勤め先が卸しているパンなのよ

「おまえも作れるのか？」

聞かれて言葉に詰まる。

パン屋に勤めているが、製造工程には入れてもらつてはない。売り子として店先にいるだけで、たまにお使いに出るぐらいだ。

「……習えば、出来るかしら？」

何となく出来ないといつのは癪に障り、一応、言葉を濁してみると、アルトリートが憮然とした顔を、反らしてから言つた。

「作れるなら、電気を引いてやってもいいぞ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。だが理解した瞬間、アルトリートの態度に口元がゆがむ。

笑いたい。

思い切り、笑いたい。

そこまで気にいったのだろうか。アマーリエの皿一つと同じ価値がこのパンにあるというなら、明日にでも是非にでも買わなければならぬだらう。

「分かつた。習つてくる」

「出来たら電気を引いてやる。それまでは買つてこい」「どうやら本当に気にいつたらしく。

今までパンを作っていたヨハンをチラリと見ると、おいしいですね、ヒーローと笑みを浮かべた。

口の端についたパンくずを取つてあげながら、いいの？ と尋ねる。

「はい。僕にはまだまだ学ばなければならないことがありますから、パンはアマーリエさんにお任せします」

本当に可愛いことを言つた。ヨハンは、アマーリエが城での手伝いが出来ないことを心苦しく思つていることを知つているのだ。だからそう言つてくれるのだ。

「使い魔つて、主人の性格に似ないのね

思わずヨハンの頭を撫でながら言つと、反対の席からひどい意味だと言われた。

「だつて、ヨハンつてばすぐ優しいじゃない？」

きっと大人になればアルトリート以上に女の子にモテるに違いない。頗良し、性格良しなのだ。顔だけのアルトリートとは大違いだ。同意を求めてアルトリートを振り返ると、頬を引きつらせた悪魔がいた。

「それを俺に聞くか？」

「アマーリエさん……」

さすがにヨハンもアマーリエの言葉に含まれた毒に気づいたのか、眉をへの字に曲げてたしなめる。大切なご主人さまを悪く言われていい気分はしないだらう。

頭を撫でながら謝る。

「『めんね。アルトリーートは幸せ者だね』

悪気があつたわけではない。

悪魔に幸せ者という言葉自体、あつてはならない言葉なのだろう。アルトリーートもヨハンもさらに顔をしかめたが、今度はアマーリエの失言に何も言わなかつた。

「マーレ?」

ふと背後から聞き覚えのある声が耳に届き、アマーリエはサンドイッチを頬ばつたまま振り返った。

「ふるふお」

幼馴染の姿を認め、サンドイッチを持っていない方の手を挨拶がてら上げる。

今日は休日だ。クルトも週末はシリングスの実家に帰ってきていることを思い出す。わざわざ電車を一時間も乗り継いで帰ってくるとはじ苦労なことだと思いつつ、大抵の休日はよく一人で遊びに出かけていた。だが最近、アマーリエが城に引っ越してからはそれもなくなつていたので、偶然とはいえ休日にこうして会つのは久しぶりだつた。

クルトは空いている席に座つてもいいかと確認すると、サンドイッチを手に戻つて来た。

「久しぶりですね。メレティスさん」

クルトはアルトリートに向かつてにこやかに挨拶をする。

アマーリエはクルトの様子をじつと見つめた。

あの日、シュヴァルツ城を復活させたアルトリートは、クルトとアンナをどのように言いぐるめたのか、二人を日が暮れる前に帰したのだ。城から帰る道は綺麗に整えられ、車が通れるほどの道幅に整備されていた。二人はそれを不思議にも思つていなかつたようで、門前でアマーリエに笑顔で手を振つたのだ。一人の中ではどうやらアマーリエがシュヴァルツ城に住むことが確定されていて、簡単に挨拶をされたアマーリエにはそれが寂しくて仕方がなかつたのだが……。

それ以来、クルトには会つていなかつた。アンナとは仕事が終わつてから何度か顔を合わせたが、あの日のピクニックや古城での探

検の話しさ一切していない。単に忘れていたのか、故意に記憶を消されたのか。だから、クルトもそうに違ひなく、代わりにどんな記憶が植えつけられているのか怖かつた。

「元気でやつてる?」

「うん」

不便だけどね、と最近口癖にならつてある言葉をかぶりじて飲み込む。

「大学の方はどうなの?」

「変わりないね。課題が山ほど出でるから、これから図書館に行く予定」

肩をすくめて見せるクルトに、大学生も大変だねと告げる。

クルトはちらりとアルトリートを見てからアマーリエに声を潜めて話しかける。

「それよりも、いつまであの城にいる予定?」「え?」

クルトにつられて身を乗り出し、声を潜めて聞き返す。

どうやらこのあたりがクルトが記憶操作された辺りらしい。慎重にならなければならない。

それに先ほども言つていたが、メレディスさんはアルトリートのことだろうか。

「メレディスさんつて……アルトリートのこと?」

確認を込めて尋ねると、クルトは視線をアルトリートに向けたまま頷く。見られている方は気づいているだろうに、知らんふりをしてくれているらしい。どうせ聞こえているのに。

「メレディスつていうからには先祖はシュヴァルツ城のかつての持ち主なんだろう? 何でも昔、臣下として功績を立てたレルヒ家に褒賞として与えて、現在金銭的に窮地に立たされているアマーリエから城を買い戻す算段をつけているって聞いたけど?」

クルトに違うのかと視線で問われ、思わずアルトリートを振り返る。

そんな話、聞いていない。それに買い戻すつもりがないことも知っている。大体悪魔に買い戻せるはずがない。それに、クルトの話からすると、アマーリエがいざれあの城から出ると思つてゐる。それは今のところ有利得ない話だらう。

「今はメレディスさんとの話がつくまでの間、あの城に住んでいる

だけだと聞いたけど……危なくないかな」「危ない？」

何故、田をえぐられそうになつたことを知つてゐるのだろうか。だが、命の危険にはさらされたことはない。何を考えているのか、まだアルトリートの復讐とやらは始まつていないのでだから。取りあえず笑顔で大丈夫と告げる。

「でも、仮にも若い男女があんな人気のない場所で……。それにメレディスさんは格好いいし、お金持ちだし……」

頬を赤くして言い淀むクルトが何を言いたいのか察して、何の心配をしているのだと果然とする。

相手は悪魔だ。確かに容貌はすばらしくいい。クルトの話からすると、きっと彼の中では出来すぎた人物像が出来ていて違ひない。でも、悪魔なのだ。

「なに馬鹿なことを……」

心配しているのだと言ひかけたところで、アマーリエの手に冷やりとしたものが触れた。

ふと顔を上げると、笑みを浮かべたアルトリートに手をつかまれていた。それは決して握られていたのではない。なぜならそんな甘いものではなく、触れられた瞬間、アマーリエの口から言葉が出なくなつたからだ。

「すまない。話が聞こえてね」

アルトリートがクルトに謝罪の言葉を述べてゐる。それは決して話を聞いていたことに対しても謝罪するはずないのだ。

クルトの視線はアマーリエの手に重ねられたアルトリートの手に

釘づけになつてゐる。そして視線をアマーリエと合わすとゆつくりと息をのんだ。

言葉を奪われたアマーリエは何も言えずにその瞳を見返す。クルトの瞳の中に何か恐れるようなものを見つけて、彼が完全に何かを誤解してしまつたことを知つた。

だが、言葉が出せないので説明も誤解を解くことも出来ない。アルトリートが何を企んでいるのかと、ちらりと視線を移すと、面白そうに意地の悪い笑みを浮かべた顔と出会う。そして、悪魔は口を開いた。

「心配は無用だよ。確かにアマーリエは魅力的な女性だ。俺もずっと口説いているが、中々頑固でね。だからといって無理強いするのは好みではないから、彼女が心を開いてくれるのを待つつもりだ」「……口説くつて

「クルトが思わずと言つたように口を開く。

「結婚を申し込んでいるんだ」

さりげなく言い放つ悪魔を、息を呑み込んでから睨む。

アマーリエは心の中で悲鳴を上げていた。

何の拷問だ、これは。

隣の席を見ると、目を見開いた女性一人と目が合つた。聞こえていたのか、今の話は。

アマーリエは意を決してアルトリートの手を振りほどくと、思いのほか呆気なくその手は離れた。

「ば、馬鹿なことを言わないで！」

上ずる声で反論するが、その声が妙に嘘くさい。事実を認めていふようにも聞こえ、クルトを見ると青ざめた顔をし、目が合つたと思つとすぐそらされた。

「僕、邪魔しちゃつたかな」

そう言つてそそくさと席を立つ幼馴染の態度に、思わず手を伸ばしかけるがクルトが席を離れる方が早かつた。

クルトはもうアマーリエの方を見ようともせず、アルトリートに

簡単な挨拶をすませるとさっさと離れていった。

図書館の方に向かつて歩いていくクルトの後ろ姿を見て、思い切り息を吐き出す。文句の一つでも言つてやらねば気が済まない。

「ちょっと、アルトリート

「おまえは俺のものだ」

普通の女性なら顔を赤くするところだろうが、アマーリエは違つた。悪魔に人間と同じ感情があるとは思えないため、その言葉の意味は、言葉通り『物』扱いだ。

「私はあなたの物ではないし、クルトに手出ししない約束だつたはずよ」

城に住むことを決めた時、周囲の人間を巻き込まないことだけは約束させた。復讐はアマーリエ一人のみ。

「放つておけば、あいつは勝手に巻き込まれに来ただろう。おまえに氣があるようだつたからな」

「クルトは幼馴染だから心配してくれていただけ。きちんと話せば分かつてくれたわ」

「幼馴染だと思つているのはお前だけだ。それに、このほうが手つ取り早い」

その言葉からは律儀にもアルトリートがアマーリエの周囲の人間を巻き込まないという約束を守つてくれようとしていることが窺えて意外だつた。

それにも、だ。

こんな衆人環視の場で、結婚の申し込みとか言わないで欲しかった。

シリングスは小さな町だ。明日には町中に噂が広まつているに違いない。噂好きのアンナの母親イルマの耳でも入れば、明日は根掘り葉掘り聞かれて、仕事にはならないかもしねれない。

怒りにふるふると震えながらサンドイッチにかぶりつく。もう味など分からなかつた。

三ハンの観察日記 1（前書き）

桁を多く取っている日付けは文字化けではないです。

198・931日

「ご主人様が（を？）助けた女性との共同生活は思つていたよりも悪くないみたいだ。アマーリエさんは本当にメレディスの血を引くお嬢様には見えない。女性にしてはとても逞しく、頼もしく、庶民的だ。僕の仕事を手伝ってくれようとしてくれる。（掃除も料理も散々だつたけど）。でも、とても気を使ってくれる。（子供扱いだけど）。僕はアマーリエさんよりも年上だつてこと、最初に言つたんだけどなあ。

198・938日

電気、とはなんだるう？

最近よくアマーリエさんがご主人様に言つてている言葉だ。常に不満そうにしているには気づいているんだけどね。でも、アマーリエさんもお間抜けさんだなあ。僕たちは悪魔なんだから、何かと引き換えじゃないとタダでお願いは叶えてあげられないんだよ？よく言つでしょ？タダより高いものはないつて。

198・942日

さつきアマーリエさんに町に行こうと誘われた。

「一ん、あの顔は何か企んでいる。」「ご主人様も多分、あの会話は聞いていただろうから気づいているだらうけど。アマーリエさんは嘘をつけない人だね。メレディス家の人間にしては素直すぎるよう

な気がするけど。本当に腹黒メレディスの血を引いているのだろうか。

でも、本当は少し樂しみだ。人間に近づくと食事が出来るしね。以前、アマーリエさんの味見をしたら『ご主人様に睨まれた。あんなに美味しそうな匂いがしてゐるのに駄目だなんて。』ご主人様が一人占めするなんて、珍しい。でも、分からなくなつた。つまり食いしたアマーリエさんは、いい感じに不幸な味がしたからなあ。

198・948日

久しぶりの町は、いい感じにお腹が膨れた。隣の席に座った女子たちとアマーリエさんの幼なじみからは同じ匂いがして、ご主人様の了解を得て食事を分けてもらつた。『こちそつさまでした。

アマーリエさんが僕を町に誘つた意図が分かつたような気がした。実際、口にした食事は三百年前とは味が違う。僕の味覚やご主人様の味覚は三百年前のものだ。一方、アマーリエさんの味覚は今のもの。アマーリエさんは優しいから不味いと直接口に出して言わないけど…。僕としたことが不覚だったなあ。着るものはアマーリエさんが町で買つてきた本を参考に見ることが出来るけど、味だけは見ただけじゃあ再現はできないからね。もっと勉強しないと。

それにしても、やっぱりアマーリエさんは変わつた人だ。あのご主人様に（嘘の）プロポーズをされて、普通の女性なら惚けるはずなのに怒りだすんだから。本当に、からかいがいのある人だよ。

三ハンの観察日記 1（後書き）

一人称は苦手なんです。でも、これは書いてて楽しかった。

6・悪魔に人間の理屈は通用しない 1

この冬、はじめての雪が降った日の朝、アマーリエは毛布から出でた鼻先が冷たくて困を覚ました。思わず寝がえりをうちながら毛布を頭からかぶる。

「アマーリエさん、朝ですよ」

まるで見計らつたように声をかけられ、それでもモゾモゾと悪あがきをしてみる。

ヨハンは暖炉の灰をかきわけ、残っていた熾火を確認すると、薪を入れて火をつけようとしてくれているに違いない。

実はアマーリエよりも年上らしい使い魔だが、見た目十歳の少年に毎朝そこまでさせるにはさすがに良心が咎めて、仕方なく毛布をのけて身を起こす。

「おはよ、ヨハン」

吐く息は白い。

石造りの建物はさすがに冷える。これでも暖炉に熾火を残していったというのに、冷えの方が圧倒的に強いらしい。

パジャマの上にガウンを羽織り、足が冷えないように靴下を履く。それでも底冷えがするような気がして両手で腕をさすりながらヨハンに近寄る。

「魔法を使つたら早いんじゃないの?」

最近は彼らの存在自体に慣れてきた為か、信じられないような魔法にも恐ろしいことに耐性がついてきていたらしい。昔ながらの方で火をおこそうとする使い魔にアマーリエはより暖炉に近づいて問う。まだ薪に火は移っていないが、それでもほんのりと暖かく感じる。

ヨハンは火をおこすことをまるで楽しんでいるんだ、といふよう

な笑顔を向けた。

「電気と一緒にですよ。使いすぎると必要な時に使えなくなります」何を例えて言われているのか気づき、思わず呻つた。

念願の電気は、なぜか自然に優しい太陽光発電ということになつた。だが肝心の電気は、アマーリエの生活空間に使われるだけで、悪魔と使い魔の生活空間には使われていない。台所もパンを焼く窯は昔ながらの石やき窯なので電気は必要ない。つまりところアマーリエの生活はそれほど便利にはなつておらず、自分の部屋にのみ明かりがスイッチ一つでつくようになつたくらいだ。それでも夜更かしは出来るし、携帯電話の充電も出来る。テレビもなんとか見れるので以前に比べると格段と娛樂は増えた。

娯楽が増えると無駄に電気を使うことに慣れている現代人のアマーリエは、発電源が太陽だということをすっかり忘れていたのだ。

秋も深まり、晴れ間の少ない日が続いていた。日が落ちる時刻も早くなり、蓄電率を確認していなかつたのも悪かつた。

お風呂も電気で沸かせるようになつていていた為、テレビを見ながら湯船にお湯をためていた時だ。突如、部屋の電気が消えたのだ。

周囲は森に囲まれているため、部屋は暗闇に包まれ、一瞬身動きが取れなくなる。

「え？」

浴室から勢いよく出る水の音だけが響く。

自分の手のひらさえ見えないほどの暗闇に、心臓が大きく脈打つ。落ち着いてと呪文のように唱えながら、何をしなければならないのか必死で考え、慎重に寝台から降り立つ。

取りあえず、手さぐり足さぐりで何とか壁に行きつくと、壁沿いをなんとか伝つてスイッチのところまで辿り着くが、何度スイッチ

を押しても当然明かりはつかない。仕方なく、先ほどから聞こえる水音を止めなければならぬと思い、また壁沿いに浴室まで進む。扉を開けて、また手さぐり足さぐりで浴槽まで何とか辿り着くが、肝心の蛇口がわからなくて浴槽の縁に手を掛けた時だつた。蒸氣で濡れていた縁に手を滑らせ、思いきり暗闇の中、浴槽にダイブしてしまつたのだ。

一瞬、何が起つたのか分からなかつた。
暗闇と浮力でどちらが上なのか下なのか分からず、突然のことには混乱もしていた。

思いきり水を吸い込み鼻の奥に激痛が走る。おかげで涙も出て口で息を吸おうにも、気管の中にも水が入り込む。
本気で浴槽で溺れかけた時、わずかな明かりと共に首を背後から引っ張られた。

「なにやつてる」

盛大に咳き込みながら、肺に入り込んできた空氣を水と共に再び吐き出す。

喉がひりひりして、生理的な涙が流れる。

「ヨハン、タオル」

浴室の床に蹲り、声を出そうにも喉の奥からヒューヒューと音がするだけで声にならない。

バサリと背中からタオルがかけられ、ゆっくりと背中を撫でられた。

「残念だつたな。自殺する気なら俺の目の届かないところにしろ」
違う、と言おうとしてまだ声が出ず、咳だけが零れる。

タオルで口元を押さえ、どうにか身を起こす。涙で滲む視界が、この城で生活を始めた頃に、夜には欠かせなかつた蠟燭の明かりが揺らめく。

また馬鹿にされると思いながらアルトリーントを見上げると、案の

定、腕を組んだ悪魔に見下ろされていた。

「どうして電気が切れたのかと言いたいのか？」

何とはなしに、アルトリートが何かをしたのではないのかと思つた。

視線でそれに気付いたのか、目の前の悪魔はわずかな明かりでさえその濃金髪を煌めかせながら鼻で笑つた。

「何でも俺のせいにするな。調べておいてやるから、おまえはそのまま風呂に入れ。あいにくと湯は沸いてるようだな」

浴槽に手を浸して温度を確認したアルトリートはヨハンを伴つて浴室から出でていく。ヨハンは手に持つていた燭台を湯のかからない場所に置くと、アルトリートの後をついて出ていった。

その後、電気の使いすぎだと判明し、それ以来電気の使い方には気をつけるようになった。蓄電率にも注意を払い、暖房もこつして暖炉という方法を取つてしているのだ。ヨハンの手を煩わせるのは申し訳ないが、冬の間は特にこの地方の気候から蓄電率には注意が必要なので仕方がない。

「魔法にも底があるんだ？」

薪に火がうつり、少しだけ肩から力を抜く。ゆっくりとだが部屋が暖まりつつある。

赤々と燃える薪の様子をしばらく見ていたヨハンは、二コリと笑つて頷いた。

「僕の場合はですけどね。ご主人さまはそんなことないですよ、多分」

ヨハンの言葉を借りるなら、どんなことも大抵のことは出来てしまふアルトリートらしい。しかしながら、日頃アルトリートが何をしているのかアマーリエは知らない。大抵書庫にいるか、それでなければまったく姿を見せない時もある。何をしているかは謎であるが、一つ言えることは未だにアマーリエに対して復讐をしようとして

ていないことだ。だが、アマーリエが溺れそうになると馬鹿にしつつも助けてくれたりもした。これで一度も命を助けられたと思うと、一体、あの悪魔が何を考えているのか本当に分からない。

「ねえヨハン。アルトリーートは本当に復讐をするつもりがあるのかしら？」

首を傾げると、同様、ヨハンも首を傾げた。

「さあ、僕には何とも。あ、でも悪魔は本当のことは言いませんから」

「悪魔はって……あなたも使い魔なのだから悪魔なのでしょう？」

「そうですよ。だから僕も信用してはいけませんよ？」

始終二口二口しているヨハンは、薪に上手く火がついたことを確認すると立ち上がった。

「着替えたら朝食を食べに来て下さいね。今日は雪が降りますから、町に下りるのに時間がかかるかもしませんね」

そう言って、部屋から出ていった。

本当によく気のきく使い魔だ。窓の外をながめながら、確かに仕事を行くのは一苦労しそうだと溜息を落とした。

7・悪魔に人間の理屈は通用しない 2（前書き）

ちょっとだけ長めです。

7・悪魔に人間の理屈は通用しない 2

着替え終わって食堂に行くと、すでにテーブルには朝食の準備が終わっていた。

軽く十人は食事をすることができるほどのテーブルには、いつも真っ白いクロスがかけてある。広い食堂はほんのりと暖かくしてあり、一体いつからヨハンは暖炉に火を入れてくれていたのかと思う。いつもながらヨハンは手早い。手伝おうと思つても手伝えたことが一度もない。

すでに席に着いているアルトリートは、朝からその美貌は眩しいばかりで、悪魔だといふのに早起きですつきりとした表情をしている。

「おはようございます」

城主はアマーリエのはずなのだが、なぜだか上座に座っている悪魔に挨拶をする。最初こそ返事が返つて来ないことに悪魔に礼儀など言つても無駄なのかと思つていたが、両親もいない今、朝の挨拶も出来ないのではあまりにも寂しすぎる。だからしつこく挨拶を続けていたのだが、ある時アルトリートの頭が小さく揺れていることに気づき、気に食わない奴なのにどうしようもなく嬉しかったことを覚えている。

毛糸の出来た毛糸のカーディガンを羽織り、足にはレッグウォーマーといつ冬の休日用の姿に、ヨハンが気づく。

「あれ、今日は仕事お休みですか？」

「ん、さつき電話があつてね、シリングスの町もかなり積つているよつのよ。道も雪かきをしなくちゃいけないみたいで、こんな日はお客様も少ないので休んでいいって」

イルマは、アマーリエがこんな山奥に住んでこることをよく気づ

かつてくれている。今では噂が噂を呼んで、なぜだかアルトリーントーがアマーリエの婚約者ということで落ち着いているが、町の年頃の娘たちはアルトリーントーの噂を聞いて、アマーリエに一人の関係的具体的な話を聞きに来てついでにパンを買って行つてくれるので、パン屋もなかなか繁盛している。

多分、イルマは雪を理由に気を利かせたつもりなのだろう。はつきり言つてありがたくないが、休みになつたことは単純に嬉しい。普通に町まで歩くなら十五分はかかるのだ。帰りは上りのためもつとかかる。

しかも雪道となると、あまり想像したくはない。一度や二度、多分、転ぶだろう。

「せっかくおまえが雪だるまになるといふを見られると思つたんだがな」

湯気が立ち上るカップを口に運びながらアルトリーントーは憎まれ口を叩く。ほのかに「一ヒーの香ばしい匂いが漂う。

いつものことなのでアマーリエも自分の席に座りながら素早く応対する。

「私はこの町で育つたんだから、これぐらいの雪なんてどうってことないわ」

先ほどまでの後ろ向きな考えを見透かされたようで、思わず強気に出でてしまう。

「毎日風呂に入つていて、風呂場で溺れた人間の言つ台詞か？」

「あれは暗くて見えなかつただけでしょう。雪だと氣をつけish、まして雪だるまになんてなつたことがないわ」

少なくとも、生まれて二十年。雪で転んだことはあっても取りあえず怪我はしたこともないし、まして雪だるまになるほど全身雪まみれになつたことはない。もちろん遊びでもそこまでしたことはない。

昨夜、準備しておいたパンを朝、ヨハンが焼いてくれたらしい。手に取ると、ホカホカと温かく柔らかかった。千切ると、いい匂い

がする。

「ね、ヨハン。あとで外で遊ぼう」

窓の外は一面雪景色だ。まだ誰の足跡もついていない純白の庭は、見慣れたいつの庭と違つて見える。

焼きたての目玉焼きとカリカリに焼いたベーコンを皿に乗せ、ヨハンはテキパキとテーブルの上に準備をしていく。

「はい。雪は久しぶりなので楽しみです」

二口りと笑い返され、アマーリエも笑い返す。

先ほどヨハンは、悪魔は本当のことを言わないと言つたが、この笑顔を見ている限りでは樂しみといったことは嘘のようには見えない。着替える間もずっと考えていたのだが、『本当のことを言わない』が『嘘をつく』とは言えないのではないだろうか。『本当のことを言わない』が『黙つている』ことはあるだろうが。

考えながらフォークでコツコツと皿をつつく。行儀が悪いと思いつつ、半熟玉子で皿の上に何気に文字を書いていく。

『本当（以下同文）』イコール『嘘をつく』と『本当（以下同文）』イコール『黙つている』なら、『嘘をつく』イコール『黙つている』にならなければならないはずだがそれだとおかしい。どう考えても黙つていることが嘘をつくことにはならないだろう。そう考えるとやはり嘘をついているわけではないと結論づける。

だとすると、アルトリートやヨハンを信用してはいけないはずはない。いやアルトリートはなんとなくだが信用ならないが。

ふと顔を上げ、ちょこちよこと動きまわっているヨハンを見る。

視線に気づいたのか、ヨハンは振り返った。

「ヨハンはアルトリートが封じられていた間、どうしてたの？」

実は少し前に思つた事だつたのだが、なかなか聞く機会がなかつたのである。

アルトリートは「」の質問には興味なさそうに、パンを口に運んでいる。ヨハンはちらりとアルトリートを見たが、別に何も反応がない。

いと知ると少しだけうな垂れて視線を床に落とした。

「僕は……ずっとこの城にいました」

「それはアルトリートと一緒に封じられていたということ?」

「いいえ」

ゆつくりと銀色の髪を揺らして首を振る。

黒い瞳がぼんやりと床を見つめている。話したくないのだろうか
とためらっていると、ヨハンは弱弱しく笑った。

「ずっとこの城にいました。ずっと……」

言葉通りの意味だと気づき、思わず息を飲む。

人がいなくなつて何百年という年月が経つといふのに、その間、
ずっとヨハンはここに一人でいたというのだろうか。朽ち果てた城
に何を見て、何を思つていたのか。

あまりのことに言葉をかけられずにはいると、ヨハンはすくつと顔を
上げて笑んだ。

「だから僕は今、とても楽しいんですよ」

そう言つて視線をアルトリートに向ける。主人であるアルトリー
トが側にいるだけでヨハンはきっと嬉しいのだ。

「アマーリエさんにも感謝します。」主人さまを解放して下さつ
たのですから」

「感謝する必要はないぞ。俺を封じたのはこの女の先祖なんだから
な」

つかさず横から口を出した男を睨むが、睨まれた方は鼻先で笑う。
さも当然という態度にムツときてつい語調を強める。

「あなたみたいな悪魔が封じられていると知つてたら、絶対にこの
城には近づかなかつたんだけど!」

「ほう……。すると今頃は税の支払いも出来ずにこの雪の中、のた
れ死んでいたんだな」

あながち有り得ないとは言えなかつた現実を想像して思わず青ざ
める。相続税の支払いに今頃四苦八苦して、アパートの家賃も払え
ずに追い出されていたかもしれないのだ。アルトリートの言つてい

た通り、雪の中のたれ死んでいたかもしない。だが、今はこうして暖炉の火の側で焼きたてのパンを食べられているのだから、その現状は天国と地獄の差がある。

よくよく考えると、今この現状はまづいのではないだろうか。何度この悪魔に助けられているか。

まず一つ目に、地下の天井が崩れて死にかけたところをこの悪魔に助けてもらっている。二つ目に、相続税の支払いにこの屋敷の金目のものを売らせてもうつた（よく考えるとこれは本来アマーリエの財産か？）。三番目に浴室で溺れそうになつたところを助けてもらい、他こまごまとしたことを入れると住処を『えられ、文句を言つて電気まで引いてもらつて』いる。

思い当たつた現実に、アマーリエの態度はどれをとつてもアルトリートに対しても恩知らずな行いをしているのではないか。

朝食の席で城主が誰だとか言える様な立場ではない。むしろ上座に座つて下さいとお願いしなければならないのではないか。いや、しなくともこの悪魔は勝手に座つて『どうした？』

突然黙り込んだアマーリエの目の前を、横から伸びてきた手が視界の邪魔をする。

ハッと意識を戻すと、それでもアマーリエは憮然と言い放つた。

「そ、相続税のことには感謝してるけど、それよりもあなたは一体いつになつたら私に復讐するつもりなのよ」

だからこの城に住めと言われたはずなのに、いたぶつてやるとも言われたのに、アルトリートは何もしてこない。最初こそ、この男が何かしてくるのではないかと恐々と接していたが、アルトリートの興味が自分には向いていないと気づくと恐れるのも馬鹿らしくなつた。何を言つてもアルトリートには右から左で流されるか言い返されるかで、こちらの気分が悪くなるぐらいだ。それがアルトリートの復讐だとは思えない。

「いたぶられたいのか？」

「誰もそんなこと言つてないでしょ」「

「ならば……おまえが油断したこり、か？」

少し考える素振りを見せ、ニヤリと笑う。

だがなぜ疑問形だのだろう。本当にこの男は復讐するつもりがあるのだろうか。

首を傾げ、先ほどヨハンとアルトリートが言つた言葉を反芻する。「封印したのが先祖で、解放したのが私だとすると……復讐されるのはやっぱりヘンじゃない？」

むしろ差し引きゼロということでいいのではないだろうか。

だがアルトリートはナップキンで口拭うと、その口元に笑みを湛え、それをテーブルの上に置いた。

「悪魔に人間の理屈は通用しない」

「だったらどうして今復讐をしないのよ？」

アマーリエが油断した頃、というのは一体いつになる頃やう。それに、と続ける。

ふいに死んだ両親のことが頭に過る。

「大体、人間は寿命で死ぬとは限らないのよ？……いつ死んでもおかしくないでしきう」

それは明日かもしれないし、五十年後かもしれない。

いつもと同じ日が明日も来るのは限らないのだ。

この城での生活は、ある意味アマーリエに両親が死んだことへの悲しみを忘ることを手伝つてくれていた。きっとアパートにいればいつまでも両親の死を受け入れられずに泣き暮らしていたかもしない。

知らないうちに偶然としていたらしい。不意に前髪をクシャリとかき上げられ、はっと顔を上げる。

「なに陰気な顔をしている。不細工がもつと不細工になる」神をも冒涜するような顔立ちをした悪魔に言われて、やはりこれがいたぶつていてるうちにに入るのだろうかと考える。

不細工なのは百も承知だ。それにアルトリートを田の前にすると、

どんな人間も不細工になつてしまつだらう。

アルトリートの手を振り払うと、ふいと顔を背ける。

「あなたに言われなくても不細工なのは知っているわ。……もう、

目玉焼きが冷めてしまつたじゃない」

はからずも何となく慰められてしまつたような気がしたのは、気のせいではないはず。本当にこの悪魔は何がしたのか。

アルトリートはそんなアマーリエを見て息を吐き出すよつに笑つてから席を立つ。

いつも朝食の席で言い争うため、先に食べ終わるのは大抵アルトリートの方だ。一人が同じ場所にいては、いつまでたつてもアマーリエが食べ終わらないのでいつの頃からか、アルトリートはさつと食堂を出でいくよつになつた。

アマーリエは目玉焼きにフォークをつき刺し、口に放り込む。思わずムツとして、出でいくアルトリートの背中を睨む。口に入れた目玉焼きは、焼きたてのよつに熱かつた。

8・呪いなど誰が解いてやるか 1

メレディス城には約三十の密室がある。

城の規模としては大きくない。一階に食堂や書斎、居間などがあり、二階から四階までが密室となつていて、玄関を入つてすぐエンタランスとなつた吹きぬけは正面に二階へと上がる大階段がある。

二階の端にアーリエの部屋があり、テラスからは裏庭に下りられるようになつていて、反対端にはアルトリートの部屋があり、その隣はヨハンの部屋だ。ヨハンは大抵屋敷のことを取り仕切つているため部屋にいることは少ない。主に台所か、一階にいることが多い。

アルトリートも大抵一階にいる。主に書斎か、居間にいる。いなければこの城にいることはほとんどないとヨハンから聞いた。つまりアルトリートにとって部屋は眠る為にあるものらしい。

二階のその他の部屋はヨハンが定期的に掃除をしているようだつた。三階と四階は、実際のところ使つてはいない。アルトリートの魔力によつて復旧された為、部屋自体がひどく汚れているとかクモの巣がかかっているような状態ではないが、窓を開けたりしていい為、ひどく空気が淀んでいるように感じてしまう。

あとは地下があるが、実のところアーリエは地下に降りるのが怖かった。

台所と食堂の間にある通路から地下へと続く階段があることは知つていたが、その扉を開けるとひんやりとした空気が顔を撫でていいく。

初めてこの城にピクニックで来た時に感じたあの冒險心は不思議と起こらない。この地下に貯蔵庫と、謎の礼拝堂があるのを見たせいかもしれない。

礼拝堂 。

すごく小さくて、本来の礼拝堂とは言い難い雰囲気を出していた

部屋。

地下にあると、いっだけでも不自然さを醸し出している。

ヨハンやアルトリートなら、かつてどんな目的で使っていたか知つていていたにちがいないのだが、聞いてみたいと思つても返つてくる内容が恐ろしくて聞くに聞けない。

以前、ふざけてヨハンに聞いたことがあった。

「ね、このお城って昔と変わらないんでしょう？」

アルトリートの魔力で再建されているため、昔と寸分違わない造りだと聞いていた。それならばそれなりの歴史のある建物と見てもおかしくないはずで、そういう建物には日くがついてあたり前だろう。

「ええ、『主人さまは昔のままを再現なさっていますよ』

アマーリエの寝台のシーツを剥ぎ、ヨハンは洗濯したシーツを広げていた。アマーリエも反対側から手伝いながら、その返事にずっと聞きたくてウズウズしていたことを口にする。

「だったら、やっぱり出たりするの？」

「出る？」

ヨハンは首を傾げて手を止める。

「幽霊とか……」

「ああ……、- - 聞きたいのですか？」

「口と笑つて問い合わせられ、少し後悔する。その笑みは少し意地悪で、こういう時ヨハンも悪魔なのだと知る。

もしかして聞かない方がよかつたかも知れない。『くつと睡を飲み込むのと、ヨハンが口を開くのは同時だった。

「もちろんいますよ。アマーリエさんは見えない体質のようですから、あえて言いませんでしたけど。どんな方たちがいらっしゃるのかお教えしましょうか？」

「複数いるの！？」

「ええ。もちろんですよ。『主人様が害のある凶悪な者たちは排除

しましたから、今いる方たちは比較的穏やかな方たちばかりですよ
比較的穏やかと言われても、比較的という言葉に引っかかりを覚
える。

「なにかしたりするの？」

「アマーリエさんは大丈夫ですよ。『ご主人様の獲物ですから』
獲物なの、思わず頬が引きつる。つまり弱肉強食の世界なのか。
強者のものには手を出せないといふ。

それにしても獲物という立場がいいことなのか悪いことなのか。
だが一つ分かったことはここでの一番の弱者がアマーリエということ
になる。思わずガクリと頭を垂れる。だから気づかなかつた。ヨ
ハンが少し思案げな様子を見せたことに。

「四階の一室にピアノがあるのをご存知ですか？」
突然聞かれ、びっくりしながら首を横に振る。

「……あるの？」

「はい。そこで時々音楽会が開かれるので、今度行ってみられたら
どうですか？」

それは昼間のことだらうか。アマーリエが城にいる時にピアノの
音など聞いたことが無かつた。四階だから聞こえないだけなのかも
しれないが。だが今の会話の流れからいくと、ピアノを弾いている
のは幽霊ということになるのではないだらうか。

躊躇いながらも恐々と聞く。

「……ちなみに、誰が弾くのか聞いても？」

「ツェツィーリア様です」

初めて聞く名前だ。思わず首を傾げる。

幽霊ではないのか。

「ツェツィーリア様は最後のメレディス家のの人間です。とてもピア
ノを弾くのが好きな方で、時々ご主人様のためだけにピアノを弾い
ていらつしゃいました」

過去形の言い方に、やはり幽霊なのかと眉をひそめる。

「でも私には見えないし……」

「大丈夫ですよ。音は聞こえると思いますし、ショットイーリア様もアマーリエさんと会つてみたいとおっしゃつてましたから」

「えつと……？その人は、私のこと知ってるの？」

「はい。アルトリート様がお話ししていましたよ」

つまり、ヨハンもアルトリートも彼女とは会つてているのか。

知らない間の出来ごとに、なんとなく欣然としない感情がわき上がる。それはあまり認めたくない感情だ。

「う……ん。じゃ、ヨハンも一緒に行ってくれる？私じゃ彼女と話せないし」

「はい。では今度、音楽会がある時は行きましょう」

と言ひうような話をしてから、まだツェツィーリアのピアノを聞いてはいない。なかなか昼間にアマーリエがいることが少なく、聞く機会がないのだ。

それに、ヨハンがあまりにも簡単に幽霊の存在を認めた為に、余計にでも地下へおり難くなつた。

台所と食堂の間の通路のつきあたりにある地下への扉の前で、しばらく立ちつくしていると背後に気配を感じて振り返る。

ヨハンだつたら一緒に地下へと下りてみようと思つていたのだが、予想外にそこにいたのは薄暗い廊下でも濃金髪を輝かしている悪魔だつた。

9・呪いなど誰が解いてやるか 2

「なにをしているんだ?」

アルトリーートのチヨコレート色の瞳に見下ろされ、思わず眉間に皺を寄せる。最近は条件反射になりつつある。

「別に大したことじやないわ。それよりも足音を忍ばせて背後に立たないで」

「忍ばせてはいない。おまえが何かを考え込んでいて気付かなかつただけだらう」

つかさず返された返事にはいい加減慣れてきた。いちいち言い返す氣にもなれない。

「なにか用?」

「いや、たまたま通りかかっただけだ。……おまえこそ何をしていれる?」

同じ質問を再び繰り返され、仕方なく視線を地下への扉へと向けていた。

「地下も……昔と同じなの?」

アルトリーートが再建したとは言え、普段用のない地下だ。手を抜いていてもおかしくはないだらう。むしろ、アマーリエにとっては何もしてくれていない方が良かつた。崩れそうなならば下りられない。それが理由になる。

だが、じつは悪魔は期待を裏切る。

「そうだが?」

アルトリーートの返事と共に、手も触れてもいらないのに扉は開く。冷やりとした風がアマーリエの前髪を揺らす。

扉の向ひは闇が占め、まるで地獄に続いているかのような錯覚を覚える。

思わずぞくりとして肩に掛けっていたショールを身体に巻きつけた。ふと、先ほどとは違う、ふわりと暖かい空気が揺れて、アルトリ

ートがアマーリエの側を抜けて地下へと足を踏み出したのに気づいた。

「行ってみるか？」

手のひらを身体の横で上に向け、その上に白い炎が燃る。その明かりが地下への階段を照らし、足場を明確にする。そこは地獄への入り口ではなく、確かに地下への入り口だった。

足を一步踏み出すと、先にいたアルトリーントが空いたもう片方の手でアマーリエの手を取った。一瞬、身体が強張った。以前、アルトリーントに手をつかまれた時、言葉を出せなくなってしまったことを思い出したのだ。だが、今回は身体の自由を奪われることもないようだ、自らの意思で足は動く。

ホツとしたが、同時にこの手はなんなのだろうとも思つ。確かにアルトリーントが灯してくれた明かりで、視界はかるうじて見えるが、アマーリエやアルトリーントが動く為、自らの影で足元までは心もとないが。

「おまえの手は冷たいな」

アマーリエの下りるペースに合わせてくれながら、アルトリーントが視線を手に移す。

「冬場はいつもこうよ」

以前、手をつかまれた時は確かにひんやりとしていたのはアルトリートの方だった。階段を降りると、アルトリーントは手を離した。「で? どこに用があるんだ?」

聞かれ、視線を斜め後ろに向ける。

ピクニックの時、貯蔵庫から歩いてきて辿り着いた階段はここで間違つていない。だとすると、礼拝堂は階段脇にあったのだから、降りてきて後ろを振り返る場所にあるはず。

アマーリエの視線の先にある場所に気づいたのか、アルトリーントは先に足を踏み出した。

「ここか……」

扉を開ける前、じちらを振り返つて一瞬ニヤリと笑つ。

なんだその笑みは。

怯んだアマーリエを残して、アルトリートは扉を開けて入つていった。途端、周囲は暗くなる。

「待つて」

暗闇に一人残されるのは、「めんだった。

思わず飛び込んだ先に、濃金髪を認めて立ち止まる。

そこは、あの時と変わらない場所。小部屋であるが、決して物置きなどでは有り得ない。

「ここは、なに？」

礼拝堂というには不自然すぎる場所にある為、どこか不気味を感じさせる。だが、これ以上知らないままでいるわけにはいかなかつた。ここに再び足を踏み入れてしまった今、気になつてしまふがいい。

天井が低いため、アルトリートは天井付近まで頭がある。わずかに首を竦めるようにして、アルトリートはアマーリエを振り返つた。その目はどこか冷え冷えとしていて、いつもは暖かいチヨコレート色の瞳が光の加減か、わずかに赤みを帯びて見える。

「かつてメレディス家が悪魔を呼び出した場所だ」

「……あなたを？」

「俺だけじゃない」

言い置いて、部屋の中央に立つ。

アマーリエはずつと聞きたかったことを尋ねた。

「どうしてあなたはメレディス家と契約したの？」

かつてメレディス家がなにを望んでいたか聞いた覚えがある。

繁栄だ。

だが、結局は滅んでしまつたのだ。それがアルトリートを封じたからなのか、アマーリエには分からぬが。

「……メレディス家が代償に差し出してきたものが何かわかるか？」

「いいえ」

アマーリエの祖先がなにを差し出したのか、想像さえ出来ない。

電気を引いてもらつのでさえ、田玉を一つ寄こせといわれたぐらいだ。きっとその代償は想像を絶するものに違いない。

「寿命だ」

「え？」

「メレディス家に生まれた人間からそれぞれ寿命を三十年分

三十年。

言われた代償の大きさに目を見張る。

あの当時の人の寿命は今よりも断然短かつたはず。多分、五十歳とか六十歳とか、そのあたりだ。それから三十年分を引くと、残りは二十か三十というところ。今のアメリカとそう変わりない。

「嘘でしょう……」

「だからメレディス家は早世の家系と言われていた」

部屋の中央に佇む悪魔は無表情だった。

何を考えているのかその表情からは窺えない。どうしてこんな話をアメリカにしているのか、それすら分からなかつた。

「あなたはいつからメレディス家と係わりを持つようになったの？」
いつたいどれほどの人間の寿命を奪つたのか。たとえそれが契約だとしても、やはり目の前にいるのは悪魔でしかないのか。

わずかに赤みがかつた瞳がアメリカを捕らえる。それは人間の皮をかぶつた何かのような気がして、アメリカは後ずさる。そんなアメリカを追いつめるかのようにアルトリートは一歩進み出た。「はつきりとは覚えていない。……記憶にあるのは十五世紀あたりか……」

「そんなんに昔から……」

少なくともメレディス家は十八世紀まではあつたと聞いた。三世纪つまり三百年以上、アルトリートはメレディス家の人の命を元にこの地に繁栄をもたらしたのか。

「誰も……、メレディス家の人間はそれに對して何も言つていなかつたの？」

嫌ではなかつたのだろうか。かつて悪魔と契約を結んだ先祖のお

かげで契約を反古しよつとした者は誰ひとつとして本当にいなかつたのだろうか。

「何もなればいまだにメレディス家は続いていて、俺が封印されることはなかつただろう」

簡単な事だ。

今アルトリートが言つたことが全てだ。

誰かがアルトリートを疎ましく思い、そして封じた。それが結果だ。

10・呪いなど誰が解いてやるか 3

アルトリートがもう一歩前に出る。

「……おまえの親は、何歳で死んだ？」

「え？」

一瞬、何を聞かれたのか分からなかつた。一度瞬きをし質問に答えると、アルトリートが無表情のまま告げた。

「メレディス家の呪いはまだ生きているんだろうな」

「呪い？」

「俺が封じられたから繁栄はしない。そして厄災からは逃れられない。しかも俺がかけた呪いも解けない」

近寄つてくるアルトリートに気を取られて、思わず聞き逃すところだつた。

今、聞き捨てならない言葉を口にしなかつたか。

「あなたが……かけた呪い？」

知らず知らず眉間に皺が寄る。悪魔だから呪いはかけるかもしない。だが、アルトリートが引き換えたのはそんなものではなく、メレディス家の人間の寿命とこの地の繁栄ではなかつたのか。呪いとは何のことだろ？。

「どうこいつ」と？

思わず詰め寄る。その赤みがかつた瞳を見上げ、顔を覗き込む。アルトリートは目を反らさなかつた。正面からアマーリエを見下

るし、いつもよつよつな嫌みのある笑みではなく、普通に笑う。その笑みは悪魔のくせにどこか悲しげに見えた。

「当時のメレディイス家の当主は、俺を呼び出す前に愚かにも何度も他の悪魔を呼びだしていた。最初こそ小さなものと引き換えるぐらいの願いで満足していたようだが、人間の欲望は深い。次第に大きな願いをするようになった。もちろん、その代償も大きくなる。そいつは悪魔を相手に狡猾くやっていたようだったが、ある時交渉に失敗した。それは大きな災いを呼び、メレディイス家だけではなく領地にも襲いかかることとなつた」

「災い？」

先ほどもアルトリートは口にしていた。災いから逃れられないと。

「メレディイス家の治める領地に産まれる全ての生に死がつきまとつようになる災いだ」

それがどれほどの被害をもたらしたのか、アマーリエには想像がつかない。全ての生とは、動物はおろか植物も含むのだろうか。もしそうなら、人間の住める場所ではなくなってしまう。

想像上ではあつたがあまりの悲惨さに身震いをして、田の前の悪魔に続きを促した。

「……それで、どうしたの？」

「当主は俺を呼び出した。悪魔が呼んだ災いを、悪魔で封じようとしたのだ」

いつものどこまでも見くだした眼差しに戻ったアルトリートを見てアマーリエはもしかして、と思う。アルトリートはメレディイス家

の血を引く自分に、アルトリーートを呼び出した人間を重ねて見ているのではないだろうか。だからいつも見下したように見るのは、

アルトリーートは息を吐き出すように笑った。

「同じ悪魔でも、一度かけた呪いは同じ悪魔でないと解くことは出来ない。悪魔によって力の法則が違うからな。だから俺は蓋をするようにその上からもう一つ呪いをかけた」

「メレディス家の人間の寿命と引き換えに？」

「いや、引き換えたのはそいつの命だ」

頭の中が混乱する。

ではメレディス家の寿命はどこにいったのだらう。

頭を捻つていると、アルトリーートがアマーリエの横を通り過ぎた。薄暗い礼拝堂から出ていこうとしていて、明かりを持つているアルトリーートが移動すると当然暗くなる。

このような悪魔を呼び出した場所に取り残されるなど冗談じゃなく、慌ててアマーリエも後をついていくと階段下でアルトリーートが立ち止まっていた。

どうしたのだろうと思つていると、アルトリーートに腕を取られた。それではじめて気づいた。アマーリエは知らない間に両手で身体を抱きしめるよつとして震えをこらえていた。

「戻るぞ」

階段を上るのに腕をつかまれたまま、引っ張られる。

階段を上りきるとアルトリーートは手の上有る白い炎を握りつぶした。それは音もせず消滅する。

「熱くないの？」

思わず尋ねると、手のひらを見せられた。白い皮膚には火傷一つ見当たらない。少しも赤くなっていない。

ホッと息をつき、安心している自分に驚く。そして未だつかまれたままの腕に視線を向ける。

「喋りっぱなしで喉が渴いた。お茶に付き合え」

その言つて、再び腕を引っ張られて一番近い部屋である食堂へと連れていかれた。

部屋に入ると暖炉には火が入り、その側には椅子が用意されていた。ヨハンもいて、カップの準備をしている。部屋中にコーヒーの香ばしい匂いが広がり、まだ日中なのだと実感する。

「アマーリエさんはこちらに座つて下さい。暖かいですよ」

暖炉の側の椅子を示され、腕を離されたアマーリエはすつと地下にいた為にさすがに身体が冷え切っていたので素直にヨハンの言葉に従つた。冷え切つた足を暖炉に向けると、くすりという笑みと共に膝掛けが落とされる。どこから取り出したのか、赤のチェックの膝掛けは肌触りがよく、ふわりとしていて温かい。

「どうも……」

素つ気なく礼を言い、ヨハンが差し出したカップを笑顔で受け取る。両手で抱えるように持つて、やっと指先に血が通うのを感じる。アマーリエの好みを熟知しているヨハンが入れてくれたのは牛乳と砂糖のたっぷり入ったカフェオレだった。

「生きかえるようだわ」

胃にふわりと落ちる少し熱めのカフェオレは、じんわりと身体の中から温かくなる。砂糖の甘みが頭の奥の緊張を溶かすようだつた。

10・呪いなど誰が解いてやるか 3（後書き）

すみません。分かりづらこかもしません。もつゝ話続あます。

アルトリートは暖炉の側に立つと、皿を持って一息ついていた。

「それで……さつきの話だけど」

中途半端に切り上げられ、果たしてこの悪魔は続きを話す気があるのだろうかと心配になる。だが、アマーリエの心配をよそにアルトリートは濃金髪をかき上げると首を傾げた。

「どこまで話したか？」

「あなたが呪いの上に呪いをかけたところまで」

分からなかつたのは、メレディス家の寿命がなぜ三十年も短くなるのか、だ。そして、アルトリートは災いから逃れる為にどのような呪いをかけたのか。

「勘違いをしてもらつては困るから言つておくが、俺を呼び出した当主の命と引き換えたのは、領地の復活……つまり災いを退ける手助けだな。だから完全に災いが消えたわけではない。そのままにしておくと、再び災いがこの地を覆うわけだ」

「あなたの言つていた、他の悪魔の呪いは解けないってそのこと？」

「ああ。……だから、永久的に災いを退ける為には領地の代わりに災いを受けるものが必要になつた。この地の中核になるものだ」

分かるか、とその瞳は問うていた。

真つ直ぐに見つめられ、アマーリエは閃く。

分かつてしまつた。

今はもうアルトリートの瞳は赤みを帯びていないが、そのチョコレート色の瞳が答えを言つてている。

「メレディス家ね？」

「そうだ。メレディス家が続く限り、災いはメレディス家人間に

降りかかり、その災いを退けるのに寿命を三十年

そう言つ契約だつたのだ。

「繁栄は……？」

「面倒くさかつたから全ての災いを退ける呪いにした。残るものは必然だろ？」

別に繁栄をさせていたわけではないのだ。

悪いことがなくなつたメレディス家に残つたのは静かな幸福。早世だが幸福を約束された一族だつたわけだ。

「あなたが封じられても、呪いは生きているの？」

「何百年と続く呪いに、災いは自然とメレディスの血に向かうようになつてゐたんだな。俺が封じられても災いは確實にメレディスの人間を狙い、俺の呪いも勝手に寿命を使って退けていたんだ。だが俺が封じられていたからその呪いの力も半減されていたのだろう。全ての災いを退けることは出来なかつたようだな」

つまりメレディス家の人間は普通の人よりも早世ではあるが、人並みの幸、不幸の人生を歩むこととなつたわけか。そして、細々と生き残り、アマーリエまで続いているというのか。

「あら？」

言われて気づいた。

「……もしかして、私にも呪いがかかってるの？」

災いを追い払う為に寿命を使うというのなら、両親の早すぎる死は呪いのせいなのか。しかも自分にも呪いがかかっているというなら、残りの人生はあと何年ぐらいなのだろう。

湧き上がる不安を抑えつけるように、胸を抑える。見上げた悪魔と視線がぶつかる。アマーリエは一つまばたきをした。ずっとこちらを見ていたのだろうか。

じつと視線を反らさずにはいると、アルトリートは持つていた皿を

マントルピースに置いた。その手がそのままアーリエの方に延ばされ、頬に触れるか触れないかのところで一瞬止まる。

「どうしたの？」

アルトリートの手のない方に頭を傾げると、宙で止まつたままの手が動く。

そのまま頬に触れたと思つたら　ぐいっと横に引つ張られた。

「な、何するのよ！」

頬をつまむ手を振り払い、痛い頬をさすりながら涙田で悪魔を睨む。

「いまさら何を言つているんだ」

「だつて呪いつて……そんなの知らないわよ」

「普通、話を聞いてたら分かるはずだろ？」

「分からぬいわよ。だつて実感ないもの」

呪いだと言われても、見た目に何か変化があるわけではない。災いも今のところ、何もない。

だがそこまで思つてハツとした。

何もないことが呪いなのだ。アルトリートの話しかりすると、アルトリートは災いを退ける呪いをかけたと言つていた。面倒くさいからすべての災いを除いていたとも。よくよく考えてみると、アルトリートと出会つて、この城で暮らすようになつてからアーリエの生活は一変した。相続税の心配も無くなり、住む場所も確保した。食事はヨハンがどこからともなく用意してくるので、食費も光熱費もわからない。唯一、携帯の電話料金がかかるぐらいだ。アルトリートの封印が解かれて、本来の呪いの力が戻つたと考えたらつじつまが合ひう。

災いのない呪い。

「……もし、あなたが呪いを解いたら、どうなるの？」

寿命が惜しいという意味ではなく、単に興味を引かれて聞いてみ

た。

アルトリートは意地の悪そうな笑みを浮かべると、アマーリエから顔を背ける。

「災いの根源は『生には死を』というものだ。俺が呪いを解くと、メレディス家に向かう災いは当然おまえに向かい、一瞬で命を落とすだらうな」

表情とは裏腹に、その口調からは不機嫌さがつかがえる。不思議に思いながらも取りあえずそれは横に置き、もう一つ聞きたいことがあった。

「そうすると、私が死んだら災いはどうにいくの？」

「……メレディス家の生き残りを全て消したら、多分、消滅するだろ？……つて、おまえ……」

訝しげに眉を寄せ、アルトリートはその綺麗な顔をしかめる。上から見下されると、その迫力はいつもより増して見える。首をすくめるようにしてアマーリエは一応反論しておいた。

「呪いを解いてって言つても、それも代償を払わなければいけないでしょ？ あいにくと私には払うものはないし、まだ死にたくはないわね」

「わかつているならいい。それに……呪いなど誰が解いてやるか」一瞬の間が、アルトリートの本音を隠したような気がした。否、隠し切れてはなく、单なる照れ隠しにも聞こえる。

アマーリエは顔色一つ変えない悪魔を見上げて、気づいてしまったことが可笑しくて口角を上げた。

「うん。ありがとう」

呪いを解かないということは、アマーリエの命を助けるということにもなる。こんなわずかな間に、濃金髪の悪魔は何度、自分の命を助ける気なのだろう。まるで悪魔とは思えない所業だ。

こらえ切れずに笑い声が漏れる。

それを奇妙なものでも見るよつの眼差しで見下された。それがまた笑いを誘う。

「ねえ、アルトリート」

ひとしきり笑い、漸くその波が去ると、膝掛けを外してから立ちあがる。そして膝掛けを座っていた椅子に置くと、それでも目線が上のアルトリートを見上げる。

「なんだ」

笑われていた理由が分からず、憮然とした面持ちをしたアルトリートは両手を胸の前で組んで尊大な態度を示す。

それでもアマーリエはこの悪魔の憎まれ口や不遜な態度に不思議と腹が立たなかつた。

「ヨハンに聞いたんだけど、ツェツィーリアって幽靈がこの城にいるんだってね？」

「この悪魔が怖くないよ！」に、きつと今なら幽靈を怖くないように思える。

「……ああ」

「私、彼女のピアノを聞いてみたいんだけど」

果たしてアルトリートに聞くのが正しいのかは分からぬ。でも、多分。

アルトリートは天井を振り仰ぐように見つめ、すぐに視線をアマーリエに戻す。さらりと濃金髪の髪が首筋に流れ、思わず視線が釘付けになる。

「今ならいるみたいだぞ」

「あ、でも私、彼女の姿が見えないんだつた。……ねえ、ヨハン！」隣の台所から音が聞こえていたので、多分、そちらにいるはずだと見惚れていたのを誤魔化す為に小走りに歩き出す。それにツェツィーリアと会う時にはヨハンも一緒にと約束していたのだ。

「おい」

後ろから呼び止められ、足を止める。

「なに？」

赤いかもしない顔を見られるわけにはいかず、耳だけを傾ける。

「ソシリソシリと足音が近づいてくるのを背後に聞きながら、近づくな、止まれと心の中で念じる。

「なんでヨハンなんだ？ツェツィーリアと話したいなら、俺でも構わないだろう」「

数歩離れたところで止まつた足音にホッと息を吐きつつ、アルトリートでは駄目な理由を口にする。

「だつて、あなたが一々通訳してくれるわけ？面倒だつて言わない？」

絶対、言つだらう。確信を持つて告げると、果たして言つた意味を聞いていたのかいなかつたのかわからない返事が返つて来た。

「なんだ。それだつたら俺でも構わんだろう。行くぞ」

通訳をいとも簡単に受けたらしいうアルトリートに驚いて振り返る。

でも、アルトリートはすでに背を向けていた。

すたすたと食堂を出でいく後ろ姿が見えなくなつて、やつとアマーリエは動き出した。視線はずつとアルトリートの出でていった扉に固定されたまま、必死に自分の心に言い聞かす。

（駄目なんだから。絶対に駄目なんだから。……そつ、氣のせい。勘違い。思いあがりだ）

何かが動き始めそうな心を脇に置き、軽く頭を横に振る。違うことを考えよう。

「ツェツィーリアってどんな人なのかしら？」

自分の先祖になる人だ。興味はある。出来れば、姿が見れればいいのだが。

「試しにカメラ持つていこうかな。ああ、でも……写しちゃつたら心靈写真じゃない」

一人でぶつぶつ言いながら、アマーリエはアルトリートの後を追つた。

11・呪いなど誰が解いてやるか 4（後書き）

やつと呪いの話は終了。次話、幽霊が出てきます。

その部屋の前に辿り着くと、確かにポロンポロンとピアノの音が聞こえてきた。曲というよりも指ならしをしているといった感じで、迷い込んだ子供が遊んでいるようにも聞こえる。

アルトリートはノックも何もなしに扉を開け放ち、せっかく部屋に入つていく。気遅れしながらも、アマーリエは恐る恐る扉から部屋の中をのぞきこんだ。

日差しが入り込む部屋は思つていたよりも明るくて、内装をクリーム色に統一された室内は温かみを感じさせた。唯一ピアノの黒が部屋の中で目を引く。だが生活感を感じさせない室内はやはり寒々としていて、足を踏み入れることを躊躇わせた。

「早く入つて扉を閉めろ」

アルトリートは暖炉の前にかがみ、どこかからか用意した薪を無造作に放つてゐる。ヨハンから教えてもらつた暖炉のつけ方からすると、それではあまりにも時間がかかり過ぎる。そう思つているとポロンとピアノが音を立てた。

ぎくりとして振り返る。そう言えば、さつきまでピアノの音がしていただはず。しかし、部屋にはアルトリート以外誰も存在せず、そのアルトリートは暖炉の前にいる。

だとすると。

確かにピアノに蓋はされていない。鍵盤が見える状態で、椅子も引かれている。

今この場にショツイーリアがいるのだらうか。

「アルトリート……」

無様にも呼ぶ声は震えていた。怖くないと思つたのは間違いだ。やはり見えないものは怖い。

「ちょっと待て」

そう言つて立ちあがつたアルトリートの側で薪に火がついているのが見えた。どうやってつけたのかはこの際気にしない。側に一段と冷たい空氣の塊を感じて、一步下がる。

「ちょっと待てと言つただろう、ショッピーリア」

アルトリートが手をはたきながら近づいてくるのと、空気が震えるのは同時だった。

彼女は笑つたのだろうか。

何となくそう感じ、肩から少しだけ力が抜ける。

すぐ背後に立つたアルトリートが何を思つたのか両肩をつかんだ。ビクリと身体が慄いたのと、視界がぶれるのは同時だった。一瞬、眩暈を感じ、次にゆっくりと目を開けた瞬間、アマーリエは息をすることが忘れた。

「はじめまして、アマーリエ」

そう言つて差し出しされた手を呆然と見つめる。

先ほどまで全く見えなかつた彼女は、実体としてその場にいる。

目の覚めるような青いドレスは首まで覆い隠し清楚さを一層立て、軽く結いあげた髪は白金で、どこまでも上品でこれぞお姫様といつ女性だつた。肌は透き通るようになじみ、頬はほんのりとバラ色に染まり、ドレスと同じ青い瞳は澄んだ夏空のように力強い輝きをもつてゐる。差し出された手はすらりと指が長く、アマーリエのよっこひきぐれ一つ出来ていない。

「は、じめまし、て……」

「わいわと手を握ると、確かに感触がある。

どうしてだらうとアルトリートを見上げると、悪魔はアマーリエの反応に満足げにニヤリと笑つた。

「俺は、通訳などしない。そんな面倒なことをしなくとも直接話せ

ばい！」

「どうやらアルトリートが何かしたようだ。

確かに、半透明な幽霊が見えるよりは実体となつて話せるほうが、アマーリエも怖くはない。

「あいかわらず、意地悪な言い方しか出来ないのね」

鈴の音のような笑い声を上げ、シェツィーリアは口元を手で覆つた。そして、視線をアマーリエに向け、ふわりと微笑む。

「シェツィーリアよ。よろしくね」

歳の頃はアマーリエとそれほど変わらないように見える。実際は幽霊なのだから、実年齢がいくらなのか分からぬが。

落ち着きを取り戻すと、両肩にいまだに乗っているアルトリートの手に気づいた。

怪訝に思つて見上げて尋ねる。

「肩から手を離すとシェツィーリアさんが見えなくなるの？」

単純に聞いただけだった。だが、アルトリートは眉間に皺を寄せる

ると不機嫌そう肩から手を離す。

「見えないかしら？」

シェツィーリアに話しかけられて、首を横に振る。しつかりと見える。

ムツとしてアルトリートを睨むと、再びシェツィーリアが笑い声を上げた。そして意味深な笑みをアルトリートに向ける。

「意外だわ。あなたつて過保護だったのね」

「どこがだ」

「ふふ、気づいてないの？」

ますます不機嫌さを増していくアルトリートと、明らかに楽しんでいるシェツィーリアの間に流れる雰囲気の悪さに、この一人は仲が良かつたのではなかつたのだろうかと訝しむ。

「それよりも、こいつはおまえのピアノを聞きたいそうだ。早くひけ」

「こまでも高飛車な態度を崩さず、ショツィーリアに命じたアルトリートにアマーリエはくるりと振り返ると脛を蹴飛ばした。

「なんて言い方するのよ。それが人にものを頼む態度なの！」

「いいのよ、アマーリエ。この人の性格は分かっているから」

それよりも、ショツィーリアに手を取られピアノの側に連れていかれる。さすがに体温を感じさせない手だったが、ゆるくつかむ手はどこまでも優しい。

「あの人ことは放つておいて。わたくしのピアノを聞いてくれるのでしよう？」

青く煌めく瞳に見つめられて、思わず頬が熱くなる。

「ご先祖様がこんな美人だつたなんて。その血を継いでいるはずなのに、この美貌の差はなんなのだろ？」

ショツィーリアとアルトリートが並ぶと一枚の絵のようこそ、この世のものとは思えないほど美しい。

ピアノの前に座つて弾き始めたショツィーリアの姿も、その指から奏でられる音楽も鳥肌が立つほど美しく、神様は一物を与えないところがそれは絶対に嘘だと思った。

そう、この世に悪魔はいても、神様なんていないのだと改めて思い知った。

13・あなたって過保護だったのね 2(前書き)

少し長めです。お時間のある時にどうぞ。

「ヨハンが人間っぽい、ですって？」

素晴らしい演奏を聞き終えて、ソファで談笑していた時、何かの拍子にヨハンの話になつた。

当然、ツェツィーリアもヨハンの存在は知っていたが、アマーリエとは違う印象だったらしい。少し険しい顔をして、首を横に振つた。

「ツェツィーリアさん？」

「ああ、そうね。確かに見た感じはアルトリーントよりも人間っぽくは見えるわね」

とにかく華やかな悪魔は、人間離れしているとも言える。その点ではツェツィーリアも同意してくれた。

「あの子が人間っぽいなんて、冗談でもわたくしには言えない台詞ね」

恐ろしいと呟き、ふるりと身震いを一つする。

そんなツェツィーリアの様子をぼんやりとながめやるアルトリーントを見て、アマーリエにはやはりアルトリーントの方が悪魔っぽいと思う。

「何があったんですか？」

「……うーん、そうね。何もないんだけど、どうしても苦手ね。死んでからの方が余計にでも恐ろしいと直感で分かつてしまつ」
「どうしたことなのだろう。むしろ死んでいるのだから、恐ろしいことなどないように思えるのだが。

秀麗な眉を寄せ、首を傾げるツェツィーリアはその青い瞳をアルトリーントに向けた。

「どうしたことなのかしら？ あなた、ヨハンにはアマーリエに比べの

ように接するようにさせているの？」

「別に、何も命じてはいない。あいつにはあいつの考えがあるんだろ？」

長い脚を組みかえながら、ソファにふんぞり返っているアルトリートは暇そうに欠伸を噛みしめている。先ほどから女一人で話が盛り上がりしており、アルトリートには退屈なのだろう。シェツィーリアの勢いは完全に今時の女の子のそれと一緒に、アマーリエでさえ付いていくのがやっとだ。早々に白旗を掲げたアルトリートは先ほどから珍しくも眠たそうに目を閉じている。

「眠いの？」

そのような姿を見たことのなかつたアマーリエは驚いて尋ねる。

「最近少し、力を使いすぎた」

「え？」

よく意味が分からず聞き返すと、シェツィーリアに横から腕を取られる。

「アルトリートは長い間、封じられていたから。力を供給できていないのよ」

「……力の供給って？ ヨハンはアルトリートの力は限りがないって……」

「そうね。昔はね」

ふふっと笑つてシェツィーリアは内緒話でもするよつに耳打ちする。

「格好つけているけど本当は無茶をしているのよ。今は昔と違つて闇が薄いし、このシリングスは皆いい人ばかりだから」

「いい人ばかりだと、アルトリートには良くないの？」

悪魔はやはり悪いことが好きなのだろうか。

「力の供給が出来にくいさうよ。ま、人間は生きているつちは欲深いから、滅びでもしない限り大丈夫よ」

シェツィーリアの言葉に、ふと考える。

今この城で生きている人間はアマーリエ一人だ。とすると、アルトリートの力の供給はすべてアマーリエ一人にかかっているのだろうか。それに、もしそうなら、どれだけ自分は欲深いことになるのだろう。

落ち込みそうになつたところを、アルトリートがうつすらと皿を開けてシェツエーリアをねめつける。

「おい。誤解のある言い方をするな。俺ぐらになると、近くにいない欲も引き寄せることができる。無用な心配はするな」

後半部分はアマーリエにかけられた言葉だが、内心、心配はしていないと弦く。だが、シェツイーリアが心配をしていてはいけないと思い無言でいると、彼女がチラリとこちらを見た。

「本当に過保護ね。ちなみに、わたくしは心配などしていないわ」「相変わらずだな

「それは褒め言葉ですわよね？」

アルトリートの一枚上手をいく彼女は、優雅に微笑んでいる。小さな舌打ちをして、アルトリートは再び瞼を閉じた。

だが、シェツイーリアはふと部屋の入口を見やる。

「あんまりいじめると、あの子が来てしまうかしら」

あの子、が誰をさしているのか、シェツイーリアの口ぶりから先ほどの会話で思いつく。

「ヨハン?」

「ええ。……ねえ、アマーリエ。あなたはヨハンが子供以外の姿を取つたところを見たことがあって?」

「いえ」

あんなあどけない可愛らしいヨハンの姿しか見たことがないのは果たしていいことなのだろうか。残念なことなのだろうか。彼女の意図がわからずにはいると、シェツイーリアは溜息を漏らした。

「アルトリートの力の元は、人間の悪意、欲望……といったものらしいのね。でも、ほら、この人はいつもこんな感じでしょう? だからヨハンがいつも手を貸すの」

ショッピーリアの言つてゐる意味が分からず、頭の中に疑問符を浮かべていると、それが伝わったのか彼女は苦笑した。

「悪意や欲望を身近に作り出すのよ」

「作るつて……」

そんな簡単に出来ることなのだろうか。

「傍に人間がいれが簡単なことよ」

「じゃあ、ヨハンは私に何かするの?」

「ああ、それはないとと思うわ。いくらヨハンでもそんな無謀なことはしないでしよう。むしろ、わたくしが生きていた時代と同じ方法を取ることが一番手っ取り早いと思うのよ」

少し考える様子を見せ、ショッピーリアは困ったような笑みを浮かべた。しばらく言葉を選んでいるようだつたので邪魔をしてはいけないと黙つていると、すぐに考えが纏まつたのか口を開く。

「ヨハンの容姿は人間の女性から見て、とても魅力的に見えるのよ。あ、言い忘れてたけど大人の姿の場合ね。ちなみにアルトリートの場合度を越し過ぎて話にならないんだけど、ヨハンの場合、どんな女性も彼を手に入れれることが出来る、と思つのよ」

言われて、考へる。

確かにアルトリートに対しては、テレビの中の人間にに対する憧れと同じ感情しか抱けない。あの態度にあの性格だ。周囲から眺めていて丁度いいと思つてしまふのは仕方がない。しかし、ヨハンなら身近に感じる異性としては充分魅力がある。柔軟な態度に思いやりのある性格だ。むしろ誤解してしまう女性の方が多いのかもしれない。

そこまで考へて、ショッピーリアの言わんとしていることが分かつてしまつた。

ショッピーリアは言わなかつたか?どんな女性もこうことは、当然一人ではないのだろう。複数を示す言葉である。ヨハンの性格からして二股なんて生ぬるいことはしないだつ。せつちりと成果を上げ、しかもそこに悪意を生み出すならば……。

「もしかして、女性たちに争わせるの？」

「御名答」

思わず口から、悪趣味、と零れてしまつ。

それ以外の何が言えるだろ？

この時代になつても、男女の間に生まれる感情は変わらないわ。

自然、田舎の風景

当然、三ハンをめぐる女性たちの周囲にも影響は現れるだろう。そこに生じるのは悪感情以外考えられない。しかし、それがアルトリートの力になる為にヨハンがしていることなのだとすれば、アマーリエも批判は出来ない。こうしてツェツィーリアと話せるように力を使わせているのはアマーリエなのだから。

を閉じている悪魔を眺める。

アリトーリーはそれを甘んじて廻らてしまふ。

卷之三

少なくともアルトリートの調子がこのまま続くよう

はきつと動くだろう。まだ、町ではヨハンの噂は聞かないし、城のこととはきちんとしてくれている。噂好きのイルマが側にいるのだ。アマーリエの耳にはその手の話ならすぐに耳に入るはず。

でも出来ることならヨハンにそのようなことをしてもらいたくな
い。アマーリエにとってのヨハンは、見た目十歳程度の少年なのだ。
醜悪な人間関係の渦の中にいて欲しくはない。

「他に……アルトリートが力を供給する方法はないの？」

• • •

ツェツィーリアからあまり詳しいことは分からないと告げられた。シリングスはどちらかというと田舎町だ。都会といえる街はクル

トが通つて いる大学のある街で、バスと電車を乗り継いで、一時間も乗り物に揺られていなければ着くことは出来ない。

考えて書ざめた。

無理だ。アルトリートがバスや電車に普通に乗ることが出来るとは思えない。たとえ一緒に街まで行つても、街中でアルトリートの容姿を晒すことは無謀だ。アマーリエにとつて自殺行為だ。傍にいるだけできつと殺される。嫉妬深い女性ほど怖いものはないのだ。想像してふるふると震えるアマーリエに、ソファから身を起こしたアルトリートがチヨコレート色の瞳を向けた。

「心配するなと言つただろ?」「ひ、

「心配なんてしていません。ただ、私に害を及ぼさないでよ
きつぱりと境界線を引くと、アルトリートが嫌そうに顔を背けた。

「おまえは……本当に

何かを言いかけ、アルトリートは口を開けし手で顔を覆つ。

「何よ?」

言いかけて止められると気にな。

アルトリートは呆れた顔をして、溜息を落とす。

「可愛げのないやつだ」

続けられた言葉に、アマーリエはフツと鼻で笑つた。

「あなたに可愛いと思われたら人生終わりだわ」

言い切ると、アルトリートは苦虫を噛み潰したような顔をした。隣からパチパチと手を叩く音が聞こえ、見るとツェツィーリアが上機嫌で笑っている。

「傑作だわ。この人からこんな表情を引き出せるなんて」

「ツェツィーリアさん?」

「あなたは気にしないで、これからのことだから。ああ、それにしても気分がいいわ。何か楽しい曲でもひこうかしら」

そう言って立ちあがり、ピアノの前に行く。

「そうそう、アルトリート。何か新しい楽譜はないかしら。最近の楽曲でも構わないわよ?」

「あ、それなら今度楽器屋さんに行つて買つてしましょうか？」

思わず口をはさむと、ツェツィーリアが目を輝かせた。

「まあ、楽器屋さんつて何？樂譜を売つていいの？それとも樂器自体を売つてこのかしりっ？」

好奇心丸出しで、身を乗り出すようにして質問攻めを始める。先ほどまでもこの調子でアマーリエを困らせていたのだ。確かに三百年前と今ではかなり生活様式が違つはずだが、それでもアルトリートやヨハンはこんなにも質問をすることはなかつたのだ。

口を挟んだことを後悔しかけた時、アルトリートがおもむろにソファから立ち上がつた。

「おい、もういいだらう。下りるわ」

ソファに座つたままのアマーリエは腕をつかまれ、強引に立たされた。そして半ば引きずるよひに部屋を出される。

ツェツィーリアを振り返ると、呆気にとられたように口を開けていた。

「ツェツィーリアさん、また今度

どうにか言つと、手を振つた。彼女もハッとしたように手を振り返してくれたようだつたが、生憎部屋から廊下に連れ出されたアマーリエにはすぐにその姿が見えなくなる。

すんざんと廊下を歩むアルトリートはいまだアマーリエの腕を掴んだままだ。

「ちょっと、アルトリート！」

小走りについていきながら、それでも腕をつかまれたままの体勢には無理があつた。躊躇つて前のめりになる。幸か不幸か、アルトリートに腕をつかまれたままだつたので転ばずにすんだのだが。

「何もないところで転ぶとは器用だな」

「あなたが腕を掴んでいるからでしょ！足の長さだつて違うんだから。それに、何かに躊躇つたのよ！何もないつてことは……」

振り返つて、転びそうになつた床を指をして、アマーリエは思わ

ず飛び上がった。

絨毯の敷かれた廊下は足音を消してくれる。だがそこには、有り得ないものが転がっていた。

「ア、アル、トリート……あれは、思わず傍にいたアルトリートの腕を、今度はアマーリエが掴んだ。見たくはないが、もぞもぞと動くそれがどこに向かうのか見なくてはならない。かつてアパートでよく見かけた茶色くてカサカサ動く虫と一緒にだ。アルトリートの腕を盾にしてゆっくりと顔をのぞかせた。

「なんだ、怖いのか」

「だ、だつて、あんなもの今まで見えなかつたもの」
多分、アルトリートが先刻した何かが原因なのだ。ツェツィーリアを見るようにしてくれた何か、だ。

絨毯の上にうごめくのは、手首より先の手。決して激しい動きを見せないが、緩慢な動きであるだけに不気味に見え、血の氣を失った土気色の肌に異様に伸びた爪。切り口は決して綺麗ではない手首の皮膚。

何かを探すように動く手首は、指を器用に使って絨毯の上を這い回る。

「うえ……」

背筋を這うゾワゾワとした感覚と、胸に込み上げる畠の不快感に思わずアルトリートの袖をぎゅっとつかむ。

頭上から笑みを含んだ息を吐くような空気の流れを感じ、その物体を視界に入れないように視線を上げるとアルトリートはじつとその手首を見ていた。

「害はないんだが……」

ポツリと呟くのと同時に、軽い爆発音が響く。

音のした先は手首があつた場所。

視線を動かすと、そこにはかすかな煙とともにわずかな燃えカスのような煤が落ちているだけだった。

驚いて目を見張り、勢いよくアルトリーントを見た。だが、すぐに視界が塞がれる。田を覆われた手を払いのけようとする、動きを抑制された。

「な、に？」

「やはりおまえは鈍いぐらいの方がいいようだな」

「え？ な、何なの？」

訳がわらからず尋ねる。

だが、ふつと空気が動き、軽く唇に何かが触れる。それは一瞬のことでの、何かが掠めたような錯覚しかアマーリエの中には残らなかつた。

ゆつくつと外された視界には、いつもと変わらないアルトリーントの眩しいばかりの濃金髪が田に飛び込んでくる。

「何をしたの？」

動けることを確認し、またも行動を制限されたことに不愉快さを滲ませる。

「……ショッティーリアのような類を見えなくしただけだ」

だけ、を強調したような気がしたが、言われた内容に少しショックを受ける。

「じゃあ、ショッティーリアさんと話が出来ないじゃない」

不貞腐れて文句を言つと、アルトリーントは深々と溜息をついた。

「だったら、先ほどのようなものが四六時中見えても良かったのか？」食事中も、風呂に入る時も、寝る時も

食事中と言われ、口に苦いものが広がるような気がした。入浴中はもつと嫌だ。寝る時は……。

慌てて首を横に振ると、アルトリーントはさつさと背を向けた。

「ショッティーリアに会いたいなら俺に言へ。また見えるようにしてやる

そう言つてアマーリエを残して歩き出す。

先程の恐怖が消えないアマーリエは、もう見えないと言われてもやはり怖くて慌ててアルトリーントの後を追いかけた。それをアルト

リートが気づいて小さく笑つてこむ」と、もうひとアマーリは
気づいていなかつた。

13・あなたって過保護だったのね 2(後書き)

次話、ヨハンの観察日記です。

198・952日

（）最近、夕食が終つてからアマーリエさんはパンを作るのが日課だ。まだ練習中なのと言いながら、僕の目を絶対に正面から見ない。どうやら先は長そうだ。頑張らないと、いつまでたっても電気を引いてもらうことはできないよ？ご主人さまにとつて、アマーリエさんの不満は糧となつてるからかまわないんだけど、身近にいる僕の身にもなつてよ。常に焼きたての香ばしい匂いをさせるパンが田の前にあるなんて、アマーリエさん。我慢できる？

198・959日

おめでとう、アマーリエさん！やつともなパンが焼けたね。僕も嬉しいよ。これでやつとご主人様に睨まれなくてすむ……。（つまみ食いぐらい見逃して欲しいよ）

198・967日

うわあー、びっくりした。“ご主人様に呼ばれてアマーリエさんの部屋に行つたら、アマーリエさんが浴槽で死にそうになつてた！あんなに狭い場所で溺れるなんて、なんて器用な人なんだろう。いい具合に死に対する恐怖を撒いてくれたから、夜食には丁度良かつたけど。今回ばかりはご主人様も仕方なさそうだったつけ。アマーリエさんの恐怖を和らげるにはあれが一番手っ取り早かつたし。
……それについて、『ご主人様。いくら非常事態だとはいえ、問答

無用に女性の部屋（しかも浴室）に入るのはどうかと思つたがなあ。

198 - 973日

本当にご主人様はアマーリエさんを気にいつてるよね。人間は悪魔だと知ると大抵、媚びへつらうか、逆に恐れ慄く場合が多いのに。それなのにアマーリエさんはかみ付いてくるのだから貴重な人材だよ。単に、僕たちの存在をよく理解していないだけかもしれないけど。うん、多分そうだろうな。

それにしても、あの二人。朝から元気だ。朝食の席であそこまで言い合えるなんて、仲がいいのか悪いのか。アマーリエさんはご主人さまを嫌っているようにしか見えないけど。ご主人様は……ああ、はいはい。珍しいペットを飼つてる気分ですか。はい、おかしな事は書きませんよ。

198 - 975日

今朝は雪が積もっていた。仕事がお休みになつたアマーリエさんと雪だるまを作つて遊んだ。アマーリエさんがどこからか拾つてきたこげ茶色の落ち葉を雪だるまの目にし、ご主人様だと書いて笑つていた。……楽しそうだから、まあいいか。

なんだかアマーリエさんといふと自分が悪魔だということを忘れそうになる……。

198 - 979日

今日はアマーリエさんの仕事がお休みだった。地下におひる扉の

前でアーリエさんの気配を感じたけど、ずいぶん長いこと立ちつくしていたみたいだ。しばらくしてご主人様と一緒に地下へとおりて行つたけど。今まで地下には近づきもしなかつたのに、どうしたんだろう。しかも戻つてきたアーリエさんは随分青い顔をしていたつけ。あれは寒いだけじゃなかつたんじゃないかな。ご主人様もだいぶ人間に感化されてるみたいだけど、気にいつている女性に無理をさせるなんて、まだまだよね。つていうか、いくら長い間人間と接してきたからといって、人間に感化されて悪魔としての本分を怠るのは良くないです。最近のアーリエさんは不幸な匂いが薄まってるし、ご主人様にはきちんと栄養を補給してもらわないと。使い魔としての僕の力も弱まるんですよ。気にいつてるならさつといただいやえればいいのに。それである程度の補給は出来るでしょう？

198-981日

もう少しだけ様子を見る予定だつたけど、予定変更。ご主人様のあの様子では、アーリエさんをいただく氣はないようだ。メレディスの血を引いているからといって、ここまで大切にしている人間は未だかつて見たことがない……。ご主人様は僕にどうして欲しいのだろう。今までどおり動いていいのか、それとも……。

寒さも厳しくなる十一月初頭、川に沿つゝに発達したシリングスの町は、川からの冷氣に一気に凍りつく。

それでも町はクリスマス一色に染まる。子供たちは積つた雪で遊び、大人たちも雪かきの合間に飾りつけに余念は無い。恋人たちは寒さも知らずにいちゃつき、一人者は一層寒さが身にしみる。仕事帰りのアマーリエは早足で歩きながら、寒さをしのぐ。実際、昼間にイルマから聞いた話で寒さどころの話ではなかつた。

ここ最近、一段とアルトリートは寝てることが多くなつたと感じていた。だからツェツィーリアから聞いた話で、ヨハンの態度に気を配つていたのだが、城の中がいつも変わらなかつたので気づけなかつた。

「アルトリートの馬鹿……」

城への山道を登りながら、思わず罵る言葉が口から漏れる。

ヨハンが町に下りてきて、数多の女性と噂になつてるのは、まわりまわつてアルトリートのせいなのだ。ヨハンが主人である悪魔の食事の用意しなければならないのは、自ら進んで力の補給をしようとしないアルトリートが悪い。いや、むしろ進んでした方が早いような気もするが、するならしたでそれもあまり嬉しくないような気もする。だが、生きる上で必要ならば仕方がない。

弾む息を整え、玄関を開ける。

今日は早引きをさせてもらつたのだ。不意をついたのでヨハンは出迎えに出てこない。というか、出て来れないのだ。ここにいないのだから。

よし、っと一つ頷くとコートも脱がずにそのまま居間へと向かう。ノックをして扉を開けるとふわりと暖かな空気がアマーリエの頬

を撫でる。

「アルトリート」

入り口側のソファに背を向けて座っている濃金髪が田に入り、アマーリエはコートを脱ぎながら近づく。

「ちょっと、あなた。ヨハンに向をさせていいのよ」
ソファを回り込んでアルトリートの正面に行き、アマーリエは怪訝に思つて口を開ざした。

閉じられた瞼から綺麗に弧を描くように生えそろつた長い睫毛はチョコレート色の瞳を隠し、腕を組むようにして微かに傾いた身体は寝苦しそうで、その顔はすぐ不機嫌そうだ。それでも見惚れてしまつほど美しいと思わせる悪魔は、またもうたねをしているようだつた。

少し考えた末、アマーリエは息をのんでアルトリートの肩に手を伸ばした。部屋は温かいとはいえ、うたたねは良くない。果たして悪魔が風邪をひくのか疑問だつたが、寝苦しそうなので一度起こした方がいいだろと思つたのだ。

「アルトリート、起きて。寝るのだつたら横になつた方がいいわ」「昔、アマーリエは椅子に座つたまま眠つて、首の筋を痛めたことがあつた。それ以来、うたたねはしないと誓つてゐる。

ヨハンのことは取りあえず置いておき、肩を揺さぶる。

眉をしかめて、うつすらと睫毛の下からのぞくチョコレート色の瞳は焦点があつていなかほんやりとアマーリエを見上げた。

「もう夕方なのか……」

どうやら寝ぼけてはいないうで、欠伸を噛みしめて軽く背伸びをしている。もう田覚めの体勢に入つてゐるアルトリートに悪いことをしたかと思つて立つてみると、ちらりと当の本人がこちらを眺める。

「どうした、そんなところに突っ立つて。……それに、まだ帰つて
くるには早い時間じゃないのか？」

時計に目をやり、そしてニヤリと笑う。

「仕事を首になつたのか？」

「違うわよ」

完全に目覚めた様子なので、あらためて向かいのソファに座りコ
ートを置んで隣に置く。

そして脇間にイルマから聞いた噂の話しどした。

「ヨハンがシリングスの町で女性を手玉に取つてゐるって聞いたの。
あなたがさせているの？」

「なぜそんな話になるんだ」

興味なさそうに視線を反らしたアルトリートの表情は無表情に近
い。それは限りなく無表情を装つてゐるがどことなく不機嫌にも見
える。だが、アマーリエは続ける。

「ツォツィーリアさんが言つてたの。あなたが眠そつなのつて、力
の供給が足りていなかからだつて……」

「……余計なことを」

小さく舌打ちしたのをアマーリエは聞き逃さなかつた。だから一
息に話す。

「あなたの力の源は、人間の欲だと聞いたわ。それにはこの町には
欲望が少なすぎると言つてた。でも人間がいる限り欲望を産ませる
ことは可能だつて……。ヨハンはあなたの為に女性の気持ちを利用
していられるのよね？」

「……だとしたらどうだと言つんだ」

不機嫌も露わな低い声音に、アマーリエは怯みそうになる。だが
直接アルトリートの視線がこちらを向いていないだけ、完全に負け
はしない。

引きかないと、お腹に力を入れる。

「他の方法はないの？」

「……別に命まで奪つていいわけではない。これでも地道な手段を

選んでいるんだ。あまり……こちら側に首をつっこむな

向けられた視線は鋭くて、言われた言葉にやつと近づきかけていた心の距離を拒絶され、両手を握りしめる。その拒絶が、ひどくアーリエに驚愕を与えた。

同じ屋敷で生活を始め、それなりにお互いの生活感と距離感は縮まってきたと感じ始めていたというのに、そう思つたのはアーリエだけだったのだろうか。そもそも、無理やりアーリエの生活に押し入つて来たのはアルトリートの方なのだ。それなのにアーリエの生活には干渉するのに、アルトリートは近づくことを拒絶する。心配することも許さないというのか。

俯いて唇をかみしめると、かすかに口の中に血の味が広がった。ムカムカと込み上げてくる怒りに、思わず立ち上がる。

「アルトリートの馬鹿！ もう心配なんてしてやらない！」

隣に置いておいたコートを掴むと、思い切りアルトリートに投げつけた。

逃げ出すよつて間から走り出て、後ろから呼び止めるアルトリートの声を無視する。

名前を呼ばれない限り、行動を抑制されない。

アルトリートがアーリエの名前を呼んだのは、最初の一回。あれ以来、アーリエは行動を抑制されたことはない。復讐するといいながらしないのも、それはアルトリートにする気がないからだ。アーリエの名を呼ばないのも、アルトリートは行動の抑制をする気がないからだ。つまりそれはどうだつていいということだ。

階段を駆け上がり、自室に辿り着くと扉に鍵をかけた。

いつもなら夕方にはヨハンが暖炉に火を入れてくれてるので部屋は暖かい。冷え切った室内に立ちつくし、そしてコートさえアルトリートに投げてきたことを早くも後悔した。

今まで貧乏暮しをしていた為、コートは必要に迫らなければ買わ

なかつた為に一着しかない。

「……馬鹿はどっちょ」

思わず咳き溜息をつく。

取りあえず、室内用の毛玉の出来たカー・ディ・ガンとストールを巻き付け、どうしようかと考える。

アルトリートにはああ言われたが、人間の、それも女性側の意見を言わせてもらうと、黙つてなどいられない。女性の純粋な気持ちを利用するなど許せるものではない。

あいにくアマーリエの部屋は一階だが、テラスから庭に下りられる造りになつてゐる。

毛玉の出来てゐるカー・ディ・ガンは見た目的に良くないので、それは脱いでワンピース丈のセーターに着替える。下はデニムのパンツのままだが、ワンピースのおかげで太ももはそれほど冷たく感じないだろう。ストールはこのまま巻いて行くことにする。コートのように風を通さないわけではないが、幾分かましだろう。

窓を開け、テラスに出て息を吐くと、やはり部屋よりも外気は冷たく視界は白く霞んで見えた。

シリングスの町に舞い戻り、取りあえず勤め先のパン屋に顔を出

す。

「おや、マーレじやないか。どうしたんだい、忘れものかい？」

レジにいたイルマが笑顔を向けてくる。

「いえ、そうじやなくて……。昼間、イルマさんが話していた噂を教えてほしくて」

「あれ、いいのかい？婚約者のいる身で他の男に余所見なんて「楽しそうに言うイルマに曖昧に笑つて誤魔化す。忘れていたが、アマーリエとアルトリートは婚約しているということになつていたのだ。関係を説明するのも面倒臭かつたので敢えて否定しなかつたのだが、噂が落ち着いてみればすっかり町の人間に一人の関係を認

められていた。

だが、先ほどのアルトリーートとのやつとつを思に出し、ムカムカと怒りが沸き起る。

つい語調を強くして言ひてしまつた。

「いいんです！」

ハツと慌てて口元を押さえると、イルマが目を大きく見開く。そして心配げに声を落とす。

「喧嘩でもしたのかい？」でも、血潮は起らしちゃいけないよ。あとで後悔することになるからね」

「あ、違うんです」

慌てて両手を振つて否定する。だがイルマは深々と溜息をつく。「原因は何であれ、婚約者はあんた一筋つていうじゃないか。噂の男のよつに手当たり次第つていう悪い男じやないんだから許してやることも必要だよ

「あの、違う……」

アマーリエの言葉に耳を貸そつとしない雇い主は、徐々に否定も尻すぼみになる。

「これから長い年月一緒にいるんだから、ijiはあんたが一つ大人になつてだね、譲つてやればいいよ」

「はい……」

完全に押し切られた形になり、仕方なくイルマに頷き返す。どうやら素直に忠言を聞き入れたアマーリエを見て、それ以上言つ必要はないと思つたのだおひつ。途端、目をあらぬかせて詰め寄つてくる。

「ところで、何が原因で喧嘩をしたんだい？」

「いや、あの別に喧嘩つてわけじやなくて……」

やつと弁解出来そうな雰囲気だつたが、喧嘩を否定すると途端興味を失つたようにぽけつとする。

「そつなかい？別に遠慮しなくてもいいんだけど……。まあ、困つたことがあるならこのイルマに相談するんだよ。あたしゃ、あん

たの母親代わりをつとめる気なんだからね」「多少早とちりもあるが、悪い人ではないのだ。

感謝の言葉を述べ、やつとアマーリエは最初の質問に戻る。

「それで、昼間の噂を教えて欲しいんですけど」

「ん？ああ、そうだつたね。あれは口クな男じやないね」

他人の事を吐き捨てるように言うイルマを、珍しいものでも見るような目で見てしまった。

本当に珍しい。

イルマは大抵あまり他人の悪口を言わない。噂は好きだが、それに添える感想も決して人を貶めるようなものではない。表裏もなく、カラッとした性格で、アマーリエが両親を失った時には本気で泣いてくれて、それがすごく救われもした。

そのイルマが、貶めるような言葉を吐いたのだ。これは覚悟をして聞かなければならぬだろう。

「今月になつて、あたしが聞いただけでも六人だ。実際見たのも、四人ときている。あの男は確かに見目はいいだろう。ああ、あんたの婚約者ほどじやないよ。だが、ここいらの町の者に比べたら都会的ともいうのかねえ。昼間にも言つたと思うけど、さらさらの銀髪で黒い瞳が印象的な、冷淡な雰囲気の男だよ」

「冷淡なのに……モテて、いるの？」

矛盾に、首を傾げる。男女の機微はよく分からぬ。

「雰囲気が、だよ。よく使い古された言葉だけど、甘いマスクで甘い言葉を囁かれたら、大抵の女の子は参るんじやないかねえ」

イルマの話を聞くかぎりでは、確かに外見的要素はヨハンを指している。だがアマーリエの中では、どこまでも子供のヨハンしかいないのだ。甘いマスクと言わっても想像できないし、甘い言葉を囁くなどもつての外だ。

「どこに行けば会えるかしら？」

「止めときなよ。あんたには婚約者がいるんだから、近づかない方がいい」

「そこまで言わされたら興味が沸くじゃないですか。それに、遠くから見るだけなら……外見だけならあの人の方がいいのでしょうか？」
出来るだけアルトリーント引き合いに出すのはしたくなかったが、この際仕方ない。

それにヨハンなら大人の姿も見てみたいというのが本音だ。
「それはそうだけど……。いいかい、絶対に近づいちゃ駄目だよ」「何度も念を押され、漸くイルマがその男をいつも見かけるという場所を教えてもらえた。

それを聞いて、やはりヨハンに間違いないと確信する。
礼を言ってアマーリエはパン屋を出た。目的の場所は思いのほか近かつた。

川沿いにあるカフェは、さすがに冬場はオープンテラスにはされていなかつたが、それでも外にはテーブルとイスが置いてあり、天気のいい冬場では利用する客も多くはないが、いないわけでもなかつた。

川沿いと言うこともあり、風は強い。取りあえず遠くからと、カフェの中から目的の人物へと目を向ける。

向かいの席には、イルマがつけた監視役のアンナが焼きたてのアップルパイを頬張っている。

詳しい事情はわかつていないので、アンナはただ黙つて黙々とアップルパイを食べている。イルマも、アンナがいればアマーリエが無茶なことをしないと分かっているのだろう。店を出てすぐにアンナが後を追つて来たのだ。

そつとガラス張りの窓から眺めると、一人掛けのプラスチックの白い椅子をお互いに寄せて、手を繋いでいる男女がいる。

銀髪を強風にあおられてもサラサラな為か乱れる様子はない。黒い瞳は優しげに目の前の女性を見つめている。一方女性の方も熱い視線を男に向けて寒さなど感じていないようだ。傍から見れば完璧に恋人同士にしか見えない。

「マーレお姉ちゃん。お邪魔虫になるつもりなの？」

じつと外を見ていたアマーリエに、アンナがにこりと笑つて告げる。

「え？」

「だつて、あの男の人を見る目がすごく真剣なんだもん。あたし、てつくりこの間のおにいちゃんがマーレお姉ちゃんの恋人かと思つてたんだけど、違つたんだ？」

この間のお兄ちゃん、に首を傾げる。

しかしすぐに思い当たる。

「クルトのこと?」

「うん。だって、おにいちゃんはマーレお姉ちゃんのこと好きだつて言つてたから」

無邪気に告げるアンナは、アップルパイをフォークでつつきながら少しだけ大人びた笑みを浮かべる。

「もちろん、異性として好きだって意味だよ? マーレお姉ちゃんは鈍いから気づいてもらえないって言つてた」

言われ、思考が停止する。

ただ顔に熱が集まる。

だが、ここは大人として負けているわけにはいかない。

「そ、それは、ないわよ。私はもてたことないから。きっとクルトも身近にいる異性ってだけで思い違いをしているだけよ」

「そうかな。週末に一時間かけて帰つてきてるのって、マーレお姉ちゃんに会いたい為でしょ?」

「……それは、このシリングスが好きなだけじゃない?」

そんなことはないだろ? といふことは、言いながらアマーリエでも思ひ。

クルトの通う大学はかなり大きな街で、欲しいものは大抵のものなら手に入れることが出来ると言つていた。そんな街に住む若い人間がこんな片田舎であるシリングスに帰つてきたいと思うだろうか。ほとんどの若者は就職を期に戻つて来ないのだ。

言葉に詰まつていると、アンナは二コリと笑つた。

「でもマーレお姉ちゃんが好きじゃないなら仕方ないよね。あの人と比べたらお兄ちゃんは存在が靈んじやうもん」

そう言つて、窓の外を眺める。何気に酷い言葉だ。だが、子供から見てもヨハンは魅力的に見えるようだ。

その大人びた横顔を眺めながら、アマーリエは落ち着かなくて弁解を始めた。

「クルトのことが好きじゃないってわけじゃないのよ。でも異性としては違うっていうか……」

「それは友達として好きってことだよね。じゃあ、あの人は？」
視線は外に固定したままアンナが尋ねてくる。アマーリエも視線を外に移した。

「あの人ことは好きとか嫌いとか、そういう関係じゃないのよ。なんて言ひのかな……。あの人は、ある人の為に良くないことをしようとしているの。だから私は……」

「ある人？ あの人の大切な人？」

聰いアンナに、アマーリエは舌を巻きながら頷いた。

「うん。 とてもね」

「じゃあ、マーレお姉ちゃんも大切に思つていいんだね。その人のこと」

思いがけないことに、思わず聞き返す。なぜそうなるのだ。アンナの言つている言葉の意味が、アマーリエの頭の中で意味をなしてつながらない。

「だつて、その人の為にあの人があ悪いことをするのを止めようとしているんでしょ？」

アンナの言葉がゆっくりと頭の中に浸透する。

さらに追い打ちをかけるようにアンナが続けた。

「その人のこと、大切？ 異性として好き？」

「……どうして、そんなこと聞くの？」

純粹すぎる子供の質問に、アマーリエはわずかに身を引いた。誤魔化そうと思つても、アンナの目から見たらきっと嘘だとばれてしまう。それが恐ろしくなつて思わず警戒してしまう。だが、そんな警戒もアンナの前では無意味だった。

「マーレお姉ちゃん、鈍いフリはやめなよ。そのフリを続けていると、きっと周りの人は傷つくと思うよ」
ため息交じりに言われ、それでも尋ねてしまつ。

「周りの人つて……」

「お兄ちゃんとか、あの人の大切な人で、お姉ちゃんの大切な人」
そう言つて、外を見た。

アンナの視線を追つていいくと、道を走つてくる濃金髪が見えた。
遠目からでもはつきりとわかる彼の腕には、見覚えのあるコートが
ひっかけてある。

戸惑い、向かいの席に座る子供に視線を移す。

「どうして？」

「お姉ちゃんに幸せになつて欲しいと思つているよ。それに、あた
しは忘れないよ。あの日のペクーチク「
思いもがけない告白に驚愕して言葉を失つたのと、店のドアが開
くのは同時だつた。

「コートも着ずにフリフリするな

息を切らして、ぱさっと肩にコートが掛けられる。

田の前に立つ濃金髪の悪魔を見上げ、悪魔でも息を切らすことが
あるんだと、呆然と考える。だが、一方でアンナの言葉を頭の中で
反芻していた。

自分はアルトリートを大切に思つていいのだらうか。

いつもいつもアマーリエのすることにケチをつける。すぐ馬鹿に
する。傲慢で、嫌みなほど自信家で、そのくせ　何度も命を助け
てくれた。

「帰るぞ」

腕をつかまれ、立たされる。

アンナを見ると、につこり笑つて手を振つた。

「じけうさま。アップルパイ、おいしかったよ」

そう言って、先に店を出でいった。

アルトリートと連れ立つて店を出たといひで、アマーリエは我慢
ならなくなつて掴まっていた手を振りほどいた。

「どうして？」

訝しげに振り返る悪魔を見つめる。

「何がだ」

向かい合つたところで立ち上まり、アマーリエは両手を握りしめ
てアルトリートを睨んだ。

「私のことなんて放つておけばいいじゃない。あなたたちのことは首を突っ込むなって言つておきながら、どうして私にかまうのよ」「人間はすぐ死ぬ。そう言つたのはお前だろ？」「

ため息をつかれ、アマーリエは怒りのため目の前が赤くなる。

「違う！私が言いたいのはそんなことじゃなくて……」

感情と共に上がる息を整えようと、一度唾を飲み込んだ。そしてここが町中だということに、聲音を落とす。

「あなたは復讐をする為に私を生かしていると言つたわ。それなのにいつまでも復讐する気はない。私をどうしたいの？どこで私が死のうが、あなたには関係ないでしょー！」

言つておきながら、卑怯なことを言つているとアマーリエは気づいていた。これでは、アルトリートに否定してもらいたいと言つてはいるようなものだ。だが、彼は悪魔だ。そもそもどこで死のうが関係ないと言われたら、アマーリエはもうあの城に帰る気にはなれないだろう。それはひどい痛みを伴うことだと想像できるが、反面、きっとアルトリートはアマーリエの希望通り、その言葉を否定することをアマーリエ自身、気づいている。

アルトリートが口を開くのをじっと睨みつけて待つてはいるが、横から慌てたように聞きなれた声が割り込んできた。

「こんなところで何をされているんですか、一人とも。痴話喧嘩なら外じゃなくて、帰つてからやつて下さい」

視界の隅に銀髪を認め、ハツとして先ほど見ていたはずの川沿いのオープンテラスを振り返った。

当然そこには人影もなく、そして二人の間に割り込むように、いつものヨハンの姿がある。

「ヨハン……」

「アマーリエさんも。また明日は噂されますよ？」

窘めるように言われ周囲を見渡すと、確かに皆、カフュの中の客やたまたま通りがかった通行人が、興味深そうにこちらを見ていた。途端、恥ずかしくなつて俯く。

と、視界の先によく磨かれた靴が見えた。その靴は、毎朝ヨハンが磨いているものだ。

「言つたはずだ。おまえは俺のものだ、と」

頭上から聞きなれた声が降つてくる。同時にぐいっと腕を引っ張られ、今まで頬に感じていた冷たい空気が遮断される。背中に回された腕に力を込められ、今、アルトリーントの腕の中にいるのだと気づく。

「アルトリーート……」

「心配するなと言つたが、意外と心配されるのも悪くはない」

落とされた言葉に、アマーリエはゆっくりと自分を抱きしめる人の背中に腕をまわす。

そつと撫でると、なぜか周囲から拍手が沸き起つた。

どうやら仲直りを祝福してくれているらしい。

恥ずかしくて離れるタイミングを見計らつていると

「やつと僕の提案を受け入れる気になりましたか？」

その場に相応しくない、どこか冷ややかな声が、アマーリエを凍りつかせた。

思わず声のした方を見ると、そこにいたのは冷酷な眼差しを向けてくるヨハンだった。

16・「れでお尻れです 1(前書き)

改行なしの説明が長いです。

時計の針の音だけが、ソファに座った三人の間を流れしていく。テーブルの上に置かれたカップの中の「コーヒーは一口も飲まれることなく冷めきっていた。

会話の一切ない、気づまりの夕食が終わつた後、三人で居間に移つてきてからと、いうもの、すでに一時間が経過しようとしていた。アマーリエの隣にアルトリートが座り、その正面にヨハンが腰を下ろしている。アルトリートは始終不機嫌を隠すこともなく黙り込み、ヨハンは余裕の笑みさえ浮かべている始末だ。アマーリエはその場の雰囲気に本気で逃げ出したかったが、アルトリートにがつちりと手首を握られているためそれも出来ない。

シリングスの町で、ヨハンが言い放つた台詞は、主人であるアルトリートに対して告げられた言葉だった。

周囲の田もあることから帰る道すがら、それが何を意味しているのかをアルトリートは話してくれた。ヨハンは夕食の支度をすると言つて先に帰つてしまつていた。

「以前話した、メレディス家にかけられた呪いのことを覚えているか？」

城の地下室で聞いた話だ。

今現在もメレディス家の血を引くアマーリエに引き継がれていると言つていたはずだ。

「生に死がつきまとつていう呪いの方？」

「ああ。あの呪いをかけた悪魔は、ヨハンだ」

あつさりと告げられた重大な内容を、思わず聞き落としそうになつた。

隣を歩く濃金髪の悪魔を見上げ、口を開くが言葉が出てこない。

「俺はあいつと賭けをした。負けた方は勝つた方の下僕となる」とを条件とした」

結果は見ての通りだとアルトリートは告げた。現在、ヨハンはアルトリートの使い魔として契約に縛られている。

「どんな賭けをしたの？」

「あいつの呪いを無効に出来れば俺の勝ち。出来なければあいつの

勝ち」

アルトリートは、自分を呼び出したメレディス家の、当時の当主の願いなど叶えてやるつもりはさらさらなかつたらしい。だが、ヨハンの鼻持ちならない絶対的な自信を見て気が変わつた。どんな方法を使つても良いという条件をもぎ取り、賭けはアルトリートの勝ちとなつたわけだが、ヨハンが使い魔となつてぞれぐらいたつた頃か。ある提案をしてきた。

「僕を使い魔から解放してくれるのならば、メレディス家にかけた呪いを解いてあげますよ」

魅力的な提案かと言われば、当時のアルトリートにとつてそれは大した効力を持たなかつた。

「あいつは悪魔の中でも力は強い方だ。そんなあいつを契約で縛れるなど滅多にないことだ。あいつとメレディス家を秤にかけた時、どちらが得かなど分かり切つている」

当初は、メレディス家人間が早世だらうがなんだらうが、アルトリートには関わりがないことであつた。だが、何十年、何百年とメレディス家人間と関わるうちに、アルトリートの方は変わつたつもりはなかつたが、メレディス家人間の方がアルトリートにして変わつていつた。最初の頃こそ悪魔と恐れていたものを繁栄をもたらす存在となつては神と呼び、崇め、身近に感じ、最後には何の見返りも求めない友人と呼ぶものまで出てきた。それでも、アルトリートにとつてメレディス家は親しい人間ではあつたが、ヨハン

を解放してまで呪いを解いてやろうと思える存在ではなかつた。所詮、その程度だつたのだ。

だが三百年前、ツェツィーリアが生まれ、彼女が成長するにつれ全てが変わつた。

彼女は子供のころから一風変わつたところのある少女だつた。貴族の令嬢としても、庶民の娘としても目線が違うとでもいうのだろうか。今にして思えば、当時の時代にあつていない現代的な思考を持つていたといえる。アルトリートのことを人間と変わらない存在として扱い、友人の一人としてあらゆるパーティに連れ歩いた。当然、アルトリートとツェツィーリアの容貌から周囲の視線はおのずと集中することとなつたが、それでもツェツィーリアはピアノの腕前を皆の前で披露し、その容貌と人とは違う目線で多くの友人を得ていた。そんな彼女が十七歳になつた時、一人の男性と恋に落ちる。相手は、貴族や金持ちの家を渡り歩き、当田のパーティの余興で日銭を稼ぐ音楽家だつた。その時、すでにツェツィーリアの両親は呪いの影響で他界していたが、後見である年若い従兄が当然、身分もお金もないような相手をメレディス家に入れるわけにはいかないと、それを許さなかつた。普通の貴族の令嬢なら、ここで諦めようもののツェツィーリアはメレディス家を捨てる選んだ。後継である従兄も母方の貴族の後継ぎであるため、唯一の後継ぎであるツェツィーリアが出奔すれば、メレディス家など断絶する他ない。それでも、ツェツィーリアは人生が短いのなら尚更のことと、愛する人と生きることを選んだのだ。だが、そうするとメレディス家が無くなるなら、アルトリートは呪いをかける必要を失う。当時の当主と交わした契約は、『メレディス家の領地』から呪いを無くすことだつたのだから。そのメレディス家がなくなるのなら、契約は終わりを迎えたことになる。が、だからといって死がつきまとう呪いが完全に消えるわけでもない。たとえメレディス家がなくなろうとも、その血を受け継ぐものに呪いが引き継がれることに、その時になつてようやくアルトリートは気づいたのだ。

城への坂道を登りながら、息を切らせることなく喋り続けるアルトリートの横顔を見、そこに表情がないことを認める。

アマーリエは、濃金髪の悪魔がツェツィーリアとパートに揃つて出席していた話を聞いた時、わずかだが心の中に黒い何かが沸き上がった。嫌な感情だと俯きながらアルトリートの話に耳を傾ける。アルトリートはアマーリエを自分のものだと言つたが、それがどういう意味で使つたのかは、謎だ。多分、人扱いはしてくれているはずであるが、単純にアマーリエがアルトリートに向ける感情と同じものであるとは思えなかつた。そして、アマーリエもアルトリートに対しても向ける感情が、アンナが言つていたようなものであるのかが分からぬ。

それよりも、と今の話しの中になかつたことを尋ねた。

「アルトリートは、その……、その時はまだ封じられていなかつたの？」

ツェツィーリアは確か最後のメレディス家人間だつたはずだ。だとしたら、アルトリートはいつ封じられたのか。

「この時はまだだ。だが、俺を封じたのはツェツィーリアの後継だつた従兄だ。俺はあいつが出奔した後でも、呪いを連ればどこにいるかぐらいわかっていたから、あいつを連れ戻そうとした人間には便利だつたのだろう。もちろん俺が悪魔だということはメレディス家の極秘事項だ。だが、どこからか漏れ聞いたのだろう。油断してたのもあつて簡単に封じられた」

忌々しげに言い放つ。

それにはアマーリエの方が苦々しくなる。

「それで言うなら、復讐する相手はその従兄の子孫じゃないの」

「……あいつはわざわざ封を解く方法をメレディス家の子孫とした。その時はメレディスがあいつに屈して戻つて来たと思つて間違いないだろ。ならば、屈したメレディスに復讐してもおかしくはないはずだ」

とんだ屁理屈を言つアルトリーントに絶句する。

なんとなく、アルトリーントがいつまでたっても復讐をしなかつた訳がわかつたような気がした。アマーリエが封を開いたのは偶然で、実際にアルトリーントを封じた相手はどこにもいなかつたのだ。それがわかつたから、アルトリーントは何もしなかつたのだ。

「それで、ヨハンは……」

「ああ。あいつの言つたことか。俺が言つのもおかしいが、悪魔は嘘つきだからな」

つまり、信用していいのだ。

今はまだ契約に縛られているが、それを解いた時、自由になつたヨハンが本当にこの地にかけた呪いを解いてくれるのか分からぬのだ。

「……ん？ だつたら契約を解く前にあなたがヨハンに命令すればいいんじゃないの？」

全て解決じゃないと手を合わせると、横から呆れたような溜息が聞こえた。

「出来るなら最初からやつていい。あいつは俺との賭けで自分が負けた場合のことを考えて賭けを持ちかけていた。それに使い魔となつた時に、あいつの力が強いことが癪に障つたから、同じ契約で半分に封じることにしたんだ。だからあいつは今の力では呪いをどうにもできない」

「ば……」

思わず馬鹿と言いかけて口を閉ざす。

チラリとこちらに向けられたチヨコレート色の瞳に険呑な色が混ざる。

でも言いたい。癪に障つただなんて、どんな嫉妬だ。

「じゃあ、ヨハンがかけた呪いを解くには、あなたが契約を解かなければ『無理』なのね？」

「引っかかる言い方だな」

気に食わなかつたらしいアルトリーントは、それでもそれが間違つ

ていなかつたのだろう。反論はしなかつた。

しかしそれはいいとして、アマーリエにまもむ一いつ氣になつたことがあつた。

「どうして今になつてヨハンはあんな提案をしてきたのかしら？」
先ほどアルトリートの話を聞いてアマーリエは腑に落ちなかつた。誰よりもヨハンはアルトリートの側に長くいたはずだ。そしてその提案を比較的早くアルトリートにしている。ならばアルトリートが今回も提案を受け入れる筈がないことぐらい分かりそうなものなのに。

坂道を登るつている為、切れてきた息を大きく一つ吐き、いつまでたつても返事のない隣を見る。
と。

先ほどまで隣にいたはずのアルトリートの姿が消えていた。

「え？あれ…………？」

思わず振り返ると、何とも言えない顔をして立つてている悪魔がいた。それはどこか途方に暮れているような、呆れているような、怒つているような、そんな顔だ。

「アルトリート？」

「おまえは……、呪いを解きたくはないのか？」

思いがけない言葉に、驚きに田を瞬くと、アルトリートはゆっくりと歩を進める。

アマーリエの一歩手前で止まつたが、それでもアルトリートの方が背が高い。いつもよりも田線の位置が低いせいか、表情がいつもと違つて見える。

「解くのも取引なんでしょう？でも私はなにも差し出すものはないし、それにアルトリートはヨハンを使ひ魔として側に置いておく方がいいって、さつき……」

言いながら混乱してきた。しかも以前、呪いなど解いてやらないと言つていたような気がする。

それに、もしも、アマーリエがヨハンのかけた呪いを解いて

欲しいと言つたとしたら、アルトリーントがメレディス家と交わした契約は呪いを退けることだ。その時点で契約の終了を意味する。つまり、ヨハンは解放されていなくなるし、アルトリーントもいなくななる可能性があるということではないだろうか。

チヨコレート色の瞳がじつとこちらを見ているのが落ち着かない。混乱する頭を頑張つて動かすが、結局、アマーリエは一つの答えに行きつく。

「よく分からない。ヨハンのことはあなたに任せる」

赤くなりつつある頬を隠すように顔を反らし、アルトリーントの視線から逃れる。

だがすぐに、顎を掴まれ顔の向きを変えられる。

正面に整つた美しい顔の悪魔のチヨコレート色の瞳を見つけ、心臓が大きく脈打つ。

「取引のことは気にするな。だから、おまえの本心を言え」正視にたえないとはまさにこのことを言つのだと、アマーリエは思い知つた。

軽く顎と持ち上げられるよつとして視線を上向かされ、逃げ場を完全に失う。息がかかるほど近くにアルトリーントの顔があり、必要以上の距離に勝手に鼓動が早まる。それと共に頬も上気していく。

「近い！」

悲鳴のような声と同時に、両手を突き出してアルトリーントの胸を押す。

顎をつかむ手が離れた隙をついて、アマーリエは大きくアルトリーントから離れた。

「の、呪いは解いて欲しいわよ。当然じゃない。出来れば長生きしたいし……」

照れ隠しに早口になる。顔をアルトリーントから背けて、両腕で身体を抱きしめる。

「でも、あなたがヨハンを必要だと言つなら、このままで構わない。私が死んだら、呪いは消えるんでしょう?」

いつかアルトリートは言っていたではないか。確かにメレディス家の子孫はアマーリエ以外にもいるのかも知れない。だが、呪うべき存在がいなくなつたら呪いも消滅すると。だから話を聞いてから、ずっと考えていた。アマーリエが取るべき方法は一つしかない。子供を作らなければいい。子孫を絶やすならば、呪いは消える。

「わかった

土を踏みしめる音がして、アルトリートがアマーリエの横を通り過ぎた。

アルトリートが出した答えが一体何なのか、そこからは何も窺えない。アマーリエは両腕を解くと、アルトリートの後を追つた。

そして現在に至るのだが。

食事の後、さつさと部屋に引き上げようとしたアマーリエを捕まえ、ヨハンに声をかけたアルトリーートは、アマーリエを半ば引きずるよう居間へと連れてきた。すぐにヨハンはコーヒーの準備をして現れ、テーブルの上にそれぞれのカップを置くと、一人の向かいに余裕の笑みを浮かべて腰かけている。

アルトリーートは半ば目を開じて、それでもしつかりとアマーリエの手首をつかんでいふところが悔れない。

ヨハンのことは任せたと言つたのに、と諦めの心境でソファに座つていた。

だが、早一時間が立つ。そろそろ話し合いを始めてほしい頃合いだと思つていると、おもむろにアルトリーートが目を開けた。

「契約を破棄してもいい。だが、おまえが約束を守るという保証はない」

「……そこは信用していただかない」と

「悪魔の言つ信用という言葉ほど信用ならない」とぐらりとおまえだつて知つてゐるだらう」「ひ

「ええ。口先でならこぐらでも言えることですからね」

子供の姿で、冷ややかに笑うヨハンを見ると、背筋が凍りつきやうになる。

ツェツィーリアがヨハンを怖がつていていた理由が分かつた気がした。これのどこが人間っぽいものか。これほど悪魔らしい悪魔はいないのではないかだろうか。

思わずアルトリーートの方に身を寄せると、手首を解放され、肩を引き寄せられる。当然、身体は密着する。

ちりりと隣を見上げると、いつもよりも冷酷な表情を浮かべたアルトリーートに怖いと思つと同時に、半端ではない吸引力をもつて目

が離せなくなる。

凄みを増した美しさに、意識を総動員して視線を引っぺがすことになり成功すると、落ち着かない気分のままヨハンへと田に向かって。ヨハンは唇の端につつすらとした笑みを浮かべると、淡々と告げた。

「別に僕はあなたのことなど恨んでなどいませんよ。大体、この契約は正当な賭けの結果に過ぎませんし?」

余裕の態度のヨハンは、見た田が少年だが中身は違う。

「でも、悪魔は本当のことを言わないと言つたのはヨハンよ」思わず口を挟むと、黒い瞳がこちらを見つめる。

そして、良くな出来ましたとでも言つかのように手を叩いた。

「よく覚えておいででしたね。僕はあなたのことは嫌いではありますでしたよ」

だからといって好きでもなかつたということなのだ。う。

あの屈託ない笑顔がすべて偽りだつたのだろうか。アマーリエは肩を強くつかまれたこともあり、それ以上は口を挟む氣にもなれなかつた。

アルトリートが空いた片手を翻すと、テーブルの上にふわりと薄茶けた紙が現れた。端の方は破れ、かなりの年代物だということが窺える。しかも見たこともないような字で文章が綴られている。

「契約書だ」

素つ氣なく言い放つアルトリートとは反対に、ヨハンの瞳はその紙切れに釘付けになつた。その唇も嬉しそうに弧を描いているように見える。

「おまえを信用しているわけではない。だがおまえが最初に言つたことだ。それくらいのこと、やれるだろ?」

アルトリートはあきらかに挑発と分かる言葉を発しながら、契約書に火をつけた。

ボツと音を立てて一瞬にして炎に包まれる。

「アルトリート……」

不安になつて思わず隣の悪魔の服を掴む。

契約書を包んでいた炎は、燃えるものがなくなると炭だけを残して消えていった。

ヨハンはしばらく黙つたままだが、おもむろに立ちあがると自らの手を眺めて呟いた。

「ああ、やつと力が戻つて來た」

アルトリートに封じられてどれほどもじかしい思いをしていたのか、最初こそ、くつと喉の奥で堪えるような笑みを漏らしていくが、次第にそれは咲笑となる。

「僕は自由だ」

おさまつた笑いと共に、ヨハンはアルトリートを見据えて告げる。それはどこか上から見る者の視線で、アマーリエはこのままヨハンが約束を守らないかもしない不安にかられる。

だが、ヨハンはしばらくアルトリートを見据えてから、ちらりと視線をアマーリエに移す。

「人間」ときのために僕ほどの悪魔を手放そうとするあなたは愚かだ

その台詞から滲み出る感情はどこまでも蔑みだつたが、アマーリエには言葉の裏に寂しさが見え隠れしているように感じ、ある仮定を思いつく。

もしかしたら、ヨハンはアルトリートの側にいたいがためにあの提案を言ったのではないだろうか。それは、どれほどアルトリートに必要とされているかを計る一種の賭けのようなものだったのかもしない。価値ある存在だと思われていれば、提案を受け入れない。もしくは必要でなくなれば、提案を受け入れる筈だと。人間だつて同じだ。誰かの役に立つてゐると思ったなら、自分の価値を見い出せるではないか。

ヨハンはきっと最初こそ勝負の結果だつたとしても、使い魔としてアルトリートの側にいることが意外にも気にいついていたのではないか。でなければ、あんなに楽しそうに掃除をしたり、食事

を作ったりなどしないはずだ。まして、力を節約だといい、血の力をで働いたりするだろうか。

「ヨハン……」

そう思つと、いてもたつてもおられずにアルトリートから離れて、今にもどこかに行つてしまいそうなヨハンに向かつて手を伸ばす。

「おい」

だが、不満げな声と同時に後ろから腰に腕を回され、もといた場所……の隣に腰を落とすはめになつた。そこは、アルトリートの膝の上で。

首筋に感じる息と、背中に感じる体温に、心臓が跳ね上がる。頭に上つた血が、声まで上ずらせる。

「ちょっと、何してるのよ！」

先ほどまでの緊張感などまるでない悲鳴を上げ、いつの間にか身体に巻き付けられた腕をパシパシと叩く。

引っ張つても離れる素振りもないその腕の持ち主を、首を回して睨もうとして、失敗した。

すぐ目の前にチョコレート色の瞳があつた。息がかかるほど近くにアルトリートがいて、その視線が今まで見たこともないような感情を浮かべてアマーリエを見ている。その視線に込められた熱に絡め取られるように身動きさえ取れなくなる。

「アルト……」

掠れた声はどこまでも弱々しく。
唇をかすめる吐息は熱くて。

身動きさえ出来ない現状から逃げ出したくて、目を閉じた。

「そういうことは、僕がいなくなつてからにして下さー」

冷ややかな声音に、ハッと振り返る。

忘れていたわけではなかつたが、完全に無視した状態だったこと思い出し、今度は血の気が下がる。

「なんだ、まだいたのか。せつと呪いを解いて行きたいところに行け」

アマーリエの身体にまわした戒めを解く氣もなさげに、アルトリートはそのままアマーリエの首筋に顔を埋める。

「ちよつ、アルトリート！」

身を捩りながら、再びアルトリートの腕をパシパシと叩く。その一方で、呆れきった表情を浮かべたヨハンに、アマーリエは溜息をつかれつつ名を呼ばれた。

「アマーリエさん」

「なに？」

身体に巻きつく腕と悪戦苦闘していたアマーリエは、いつの間にか田の前に来ていたヨハンに気づかなかつた。名前を呼ばれ思わず顔を上げ、額に感じた柔らかい感触に思わず動きが止まる。

「え？」

離れたヨハンは先ほどまでの冷酷な顔をした悪魔ではなく、悪戯をしたような子供の顔をしていた。

ヨハンの黒い瞳は笑っていた。

「呪いは解きました。これでお別れです。僕もあなたの焼いたパンは本当に好きでしたよ」

そう言って、扉に向かうヨハンにアマーリエは、ヨハンに口付けられた額を押さえながら言わずにはいられなかつた。

「待つて、ヨハン！ あなたがここにいたければいてもいいのよ！ 私の焼いたパンが好きならいくらだって焼いてあげるわ！」

アルトリートの膝の上から叫ぶにはいささか説得力もない態勢だつたが、それでも言わずにはいられなかつた。

ピクリと肩をふるわせて立ち止まつたヨハンは、こぢらを振りかえろうともせずに、その銀髪を軽く揺らす。

「いいえ。もう一度とお会いすることはないでしょ。それに、これが以上邪魔をしたら今あなたを拘束している悪魔に殺されかねないので」

失礼しますと告げられ、扉は静かに閉じられた。

じつと扉を見つめていると、漸く身体にまわされていった腕が緩められる。

額を押さえていた腕を除けられると、苛立たしげにヨハンと同じように口づけが落とされる。

「人のものに勝手に手を出すとは……。おまえも黙つてされるがままにしておくな」

「何を、言つてつ……」

先ほどからのアルトリーントの態度は、アマーリエの中では恋人にするそれと一緒に途端落ち着かなくなる。

身体に回された腕が緩んだのをじつじつと、アマーリエは膝の上から下りる。

直後。

「アマーリエ」

名を呼ばれて、一瞬呼吸が止まる。

だが、以前のように身動きが出来なくなることはなかつた。

「あら? 動ける?..」

驚いてアルトリーントを振り返ると、ソファに座っていたはずの悪魔は立つていた。しかもすぐアマーリエの側に。

あまりにも近い距離に瞬間的に一步下がりかけ、再びアルトリーントの腕に拘束される。

「どこに行くつもりだ?」

「え、だって、ヨハンがいなくなつたのならカップの片づけをしないと」

テーブルの上には飲まれなかつたままの冷めたコーヒーが置かれたままだ。

それに、よく考えたら明日の朝ヨハンの支度もしなければならない。材料がどれぐらいあるのか台所に確認しにも行かなければない。考えれば考えるだけ、やることはたくさんあるではないか。「そのようなことは心配無用だ。おまえにさせんつもりはない」「じゃ、アルトリーントがやるの?」

吃驚して見上げると、苦笑が頭上から降る。

「明日になれば分かる。今日はもう疲れた。休むぞ」
促されるように背中を押され、テーブルにおかれたカップを気にしつつアルトリーントに従づ。

本当に、ヨハンはいなくなつたんだと思つと、途端心の中にぽつかりと穴が開いてしまつたような寂しさを感じてしまつ。呪いは解かれたと言うが、呪われていた気がしなかつたので、解かれた気もない。それよりも、気になつたのは、アルトリーントがどうして呪いを解く気になつたかだ。解いてやる氣などないと呟いていたのに。「どうして呪いを解く気になつたの?」

部屋に向かつて隣を歩くアルトリーントを見上げ、尋ねる。すでに廊下は真っ暗で、アルトリーントの手のひらの上にはいつか見た白い炎が灯つていた。

一階へと続く階段の手前で、アルトリーントは呆れたように息を吐き出し、足を止めた。

「おまえは……どこまで氣づかないつもりだ?」

アルトリーントの声は引きつっていて声と同じ表情を浮かべていた。一方アマーリー工は言われた意味が分からず階段の手すりに手をかけたまま振り返る。首を傾げると、いきなりフツと明かりが消えた。

急に真っ暗になつて、やはりこのままアルトリーントまでいなくなつてしまふのではないかと不安になつて手を伸ばすと、急に身体が宙に浮く。

「アルトリーント!?

暗闇の中、身体の側面と背中と膝裏に感じる体温に、アルトリーントに抱きかかえられているのだと気づく。

いなくなつたのではないのだとホッとしたのも束の間、頭のすぐ側で声がする。

「気づかないつもりなら、気づかせてやる」

挑戦的な台詞に、アマーリー工の方が今度は頬を引きつらせた。なにか地雷を踏んだらしい。何がいけなかつたのだろうと、必死

で頭を回転させる。

「ア、アルトリート？何をするつもり？」

だがその問いにアルトリートは答えてくれず、アマーリエはその後身を持つて知ることとなる。

絶対に、アルトリートを怒らせてはならない。

17・これでお別れです 2(後書き)

直接対決つてほど対決はしていなかつたですね。

次話、本編最終話です。

18・これでお尻れです 3（前書き）

R15かな?。念の為、苦手な方は「注意下さい（一気に下までスクロール！で大丈夫なはず……）

突然訪れた両親の死は、現実的なものとして受け入れられるものではなかつた。

でも、突然始まつた悪魔との同居生活はそれ以上に現実的ではなくて、悲しみは訪れることがなく、意地悪ばかり言つ悪魔にじう対抗してやるうかとばかり考えていた。

だから氣づかなかつた。

「……じうして、私なの？」

呼吸をえろくにさせてもらひらず、わずかに唇が離れた隙にそつとアルトリーの唇に手を当てる。背後は寝台、正面にはアルトリーと、すでに逃げ道は断たれている。

アルトリーの唇を押さえたその手を取られ、今度は手のひらに唇を落とされる。

「おまえは俺を、利用しようとななかつた」

「支払うものがなかつただけだと思わないの？」

取引が条件だと言つたのは、アルトリーだ。

「たどえあつたとしても、おまえは俺を頼りうと思わなかつただろう？」

「言われ、笑みを零す。

「そうね。毎日、腹が立つて仕方なかつたわ。次こそは言い負かしてやるつて、いつも思つてた」

その言葉に、チョコレート色の瞳が楽しそうに細められる。それはとても珍しく、嫌味なく見つめられるのは、イヤじやない。心臓が痛いくらいに絞めつけられる。いつしてみると、本当に悪魔だとは思えない。

「……いつも？」

その形のいい脣が、耳に触れるか触れないかのところで囁く。

「ええ。いつも……」

もう、認めるしかない。

気づくと、アルトリーントことばかり考えていた。

翌朝、心地よい体温の中で目覚めたアマーリーは、聞きなれない声で完全に眠気を飛ばした。

「おはよみづじやこます。アルトリーントさま、アマーリーさま」執事のよつやな格好をした年老いた男性は、控え目に扉の側に立っていた。白髪をきれいに撫でつけ、皺一つない黒のスーツを着ている。

肩から布団がずり落ち、慌てて胸元をかくすとアマーリーから視線を外すように横を向く。

「あなた、誰？」

呆然と呟くと、隣から伸びてきた手がアマーリーを布団の中に引きずり込む。直に肌と肌が触れ合った感触に、昨夜の出来事が脳内に鮮明に蘇り、頬に熱が集まる。

眠たげな声が耳元で囁く。

「あれはヘルマンだ。以前、会ったことがあるだろ？」

アルトリーントが話すと吐息が耳をかすめ、それに身を竦めながら頭の中に疑問符が浮かぶ。

「え？」

「四階で……」

どうしても眠たいらしくアルトリーントの途切れた呟きに、アマーリーは記憶を総動員する。四階に上がったことは数えるほどしかな

い。その時の印象的な出来事といえば……。

思い出して、思わず布団で胸まで隠してヘルマンの右手を見る。

それは見間違いよりもなに十色の手で、他の身体よりも明らかに色が違っていた。

「あなた、あの……」

口をパクパクさせるアマーリエ、ヘルマンは視線を逸らせたまま頷いた。

「はい。こつぞせは驚かせてしましたようで申し訳ございませんでした。ヘルマンと申します。以前はメレディス家で家令をしておりました。至らないところもありましたが、以後よろしくお願ひいたします」

深々と頭を下げたヘルマン、アルトリーントは布団から手だけを出して下がれと振る。

「朝食はいかがいたしました?」

「いらない」

承知したように頷いたヘルマンは、静かにアマーリエの部屋から出ていった。

果然としたアマーリエは、昨夜アルトリーントが言っていた意味を知った。

「風邪をひくぞ」

そう言って再び布団に引きずり込んだ悪魔にて、今度こそ簡単に逃れられないよう雁字搦めにされる。

「私、仕事に行かないと!」

「行くな……」

「でも、昨日も早引きしたのに……」

「いいから……」

耳元でささやかれ、それでも反論しようとする頭をアルトリーントの脣で塞がれ、アマーリエは呆気なく白旗を振る。

「わかったから」

昨夜からずっと触れ合っているにもかかわらず、なおも触れてく

るアルトワードに逆に甘えぬよつていつまうと、よつやく安心したのか髪を梳かれる。

あまりの心地よさに再び眠気が襲つてくる。

「ずっと側にいるから……、だからあなたも側にいて……」

心地よい眠りに落ちる瞬間、アマーリエは自分の悪魔にひつ。額に落ちた口づけが、その返事で契約であったことに気づくのは、

もう少し先の話。

198・989日

やつぱり人間の女性は扱いやすい。（アマーリエさんは……なんだか、ちょっと違つけど）

少し見つめて笑いかけるだけで、向こうから声をかけてくる。確かに、悪魔の容姿がいいのはその為なんだけど。

一日で、取りあえず四人か。悪くはない数字だな。
でもアマーリエさんはこうこうことを嫌いそつだからバレないようこじないとね。

198・991日

驚いた。町である子に会った。アマーリエさんが働いているパン屋の女の子。子供だからあの時、記憶を弄ることをしなかつたけど、見た目が違う僕のこと気に気づいたみたい。子供って感がいいからね。手を振つたら無視された。おかしいな。気づいたと思つたのに。

198・994日

あー、女の子たちの嫉妬心はなかなか甘くておいしい。でも、ちよつと町で噂になってきたかな。アマーリエさんの耳に入るのも時間の問題かも。でも、アマーリエさんは鈍いから、僕だと気づかないかも……。

198・997日

果たしてご主人様はあの提案をのんでくれるのだろうか。きっとアマーリエさんが大切なんとくれるはず。

少なくともアマーリエさんが、ご主人様の特別だということには間違いはない。シェツィーリアさまの時とは明らかに違う。うん、今思えばあの時とは明らかに違うか。だって、仕方ないよね。ツイーリアさまってば腹黒で、ご主人様の容姿をいいように利用してたもん。ご主人様も単に面倒臭かつただけなんだろうな。女の子たちが寄つてきたら、力も補給できるし一石二鳥だったんだろうな。

198・997日……か。

僕が、契約に縛られていた日数。長かったなあ。

この日記をつけ始めた頃は、恨みごとしか書いていなかつたけ。でも、今はどうだろ？……最近はアマーリエさんのことばかりだ。僕も本当言うと、アマーリエさんのこと、気にいつてたんだよね。最後に引きとめてくれたのは嬉しかつたつけ。

あー、その場の勢いで一度と会わないなんて言つちやつた。ま、でもいつか。悪魔は嘘つきだしね。しばらくしたら会いに行つてみよつと。

ねむけ（前書き）

みなさま、最後までお付き合っていただき本当にありがとうございました。少しでも楽しんでいただけましたでしょうか。

「古城に住む悪魔」の投稿を開始して約二十日間、とても充実した毎日を過ごさせていただきました。人に見ても「うとう」ということが、適度な緊張感をもつて文章の作成にあたらなければならぬ事など、色々と学ぶべきことも多くありました。

さて話は変わって、私にとつてはこの物語は中編と言える長さのものになります。執筆日数約一ヶ月半ぐらいかかりました。サブタイトル一つにつき約一週間といったところでしょうか。

お気つきょうが、本来サブタイトル一つの長さの物語を、投稿するにあたって分割させていただきました。読みづらいところがありましたでしきうが、こうして無事完結出来ましたのも、みなさまが読みに来て下さっているのを実感できたからです。

ということで、最後までお付き合って下さった皆様に感謝の気持ちを込めて、本編では完全にあて馬役のクルトと、ヘルマンのやの後をおまけで書いてみました。

おまけ

大学を卒業して4年。結局、シリングスへと戻ることなく就職をしたクルトは、友人の結婚式の為に久々にシリングスの町を歩いていた。

あの頃と変わりない町並み。川に沿うように店が連なり、かつての幼なじみで初恋の少女が働いていたパン屋の前を通りかかる。想いを伝える勇気がなく、まだ大丈夫だ、一番彼女に近いのは自分だと思いっこんでいた時にはもうすでに歯車が動き出していた。ほんの一瞬の間に、彼女は他の男に連れ去られてしまっていた。彼女の幸せを願い、いや、彼女が幸せであることを見るのが辛くて、シリングスから足が遠のいてしまっていたのだが……。

彼女は今もあの古城で暮らしているのだろうか。

そう思つて、川向かいの山の中腹にあるであろう城に目を向ける。しかし、緑の覆い繁る季節だ。見えるはずもなかつた。

カラソンド、鈴の音と共にパン屋の扉が開き、一人の少女が出てきた。

一瞬、彼女かと思った。

しかし、少女は彼女よりも利発そうな顔立ちをしていて、一ちらに気づくと、目を瞬ぐ。

「クルトお兄ちゃん？」

「え……」

なぜ自分のことを知っているのか。大学を卒業してからはシリングスへは帰ってきていません。

少女はまだ十五、六にしか見えない。四年前といえば、まだ十一、

三歳ぐらいだわ。そんな子供に知り合はいなかつたはずだが……。

「あ……、アンナ？」

そこが、彼女が働いていたパン屋で、幼なじみの彼女に懐いていたパン屋の娘がいたことを思い出した。確か、そんな名前だつたはずだ。

「覚えていてくれたんだ」

ふわりと、親しみを込めた笑みを見せられ、まだ自分はこの町の人間から忘れられた存在ではなかつたのだと知る。ゆっくりと近づいてくるアンナからは懐かしいパンの匂いがした。

「久しぶりだね。お兄ちゃんは変わらないね」

「アンナは綺麗になつたね」

女性を褒める言葉を言い慣れていないクルトだったが、思いの外、すんなりと言葉は口をついて出てきた。

「あはっ、それって社交辞令つてヤツでしょ」

それでもくすぐつたそうに笑っているアンナは、純粋で清々しく、都会での生活に疲れて、すさんでいた心を温かしてくれた。

(あ……)

瞬間、クルトはシリングスに戻つてきて良かつたと思つた。たつたこれだけのことだつたが、アンナに会えて良かつたと思つた。友人の結婚式の為であつたが、アマーリエとは共通の友人だ。教会で会う可能性は高かつたが、正直顔を合わせて普通に話せる自信はなかつた。でも、今、大丈夫だという確信が胸にわく。

「ありがとう、アンナ。会えて嬉しかつたよ」

「?どういたしまして……かしら？でも何もしていないんだけど？」

それから少しだけ会話をしてアンナとは別れた。

川沿いの道を、先ほどより軽い足取りで歩く。

アンナに、明日の夕食の約束を取ることが出来た。誘つた時、驚いたように一瞬口を開いたが、すぐに笑みを見てくれたアンナは否とは言わなかつた。

これからどうなつていいくかは分からぬ。だが、もう一度と過去の過ちを繰り返さないでいようと足を止めると、もう一度、城のある山の中腹を見上げて、自らに誓つた。

* * * * *

ヘルマンは台所で夕食の準備をしていたところだつた。もう一品作れば完璧だと思っていた時だつた。

「あ……」

裏口の扉が開き、銀髪の少年が姿を現す。

「おや……」

少年と視線が合い、お互にじろりと見つめ合ひ。だが、先に動いたのは少年の方だつた。

「まさか、ヘルマン?」

「……もしかして、ヨハンをまで?」

ヘルマンの脳裏に、かつての城主と契約していた悪魔の、使い魔の姿が蘇る。だが、たしかこんな小さな子供の姿をしていなかつた

はずだと首を傾げる。

一方、ヨハンはスタスターと勝手知ったる様子で、奥のテーブルに近づくと皿に盛りつけられた夕食を一瞥して、眉間に皺を寄せた。

「これじゃ駄目だよ

「はい？」

ヘルマンは耳を疑つた。

完璧だと思っていたが、何かおかしなものでも入つていただろうか。

ヨハンの隣に立ち、同じく料理を見下ろすがおかしなところは見当たらない。

「どこが……駄目なのでしょう？」

首を傾げると、ヨハンは深々と溜息をついた。

そして一つ一つの料理を指差し、説明を始める。

「いいかい。これ、アマーリエさんの苦手な野菜が入ってるし、これはマスターを入れたでしょ？もつと薄くしないと……。アマーリエさんは食べれないの。すぐ涙目になるんだから。それにこれは

は

結局、駄目だしされた料理は全てだった。

どうやら、ヨハンが言つことには料理自体がイマドキではないらしい。町に食べに出かけると言われても、ヘルマンは自縛靈だ。この城から出ることは出来ない。

それを告げると、ヨハンは再び深々と息を吐いた。

「仕方ない。僕が作るよ」

ヨハンの言葉に、一瞬、耳を疑う。

ヘルマンが右手だけになつて、城を彷徨つていたのはもとはといえば、この少年のせいなのだ。時の城主の呪いを解いてもらう為に、この少年が提案した賭けに乗つてしまつたのがすべての間違いだつた。賭けの内容は、一週間以内に、ヨハンの主人が持つ使い魔との契約書を探すこと。今思えば、絶対に見つかりもしないものだつたのだ。賭けに負けたヘルマンは、結局命を取られてからもずっと、

その契約書を探していたのだが。

一瞬、何かの罠かと思ったが、思えばすでに「彼はあるの悪魔の使い魔ではない。しかも、少年の口から出てきた言葉に、何度今の城主の名前が含まれていたことか。どれほど彼女に気を配っているのかうかがい知れる。それに彼の纏う雰囲気は昔とは及びもつかないほど柔らかい。

ヘルマンは信用することにして、軽く頭を下げる。

「ではよろしくお願ひ致します。アマーリエさまもお喜びになります」

「あたりまえだろ」

少し照れたような少年にその場を任せると、ヘルマンは台所を後にした。

こうして、ヨハンは再び城で生活をすることになり、アマーリエをいたく喜ばしたのでした。

おまけ（後書き）

以上です！

彼らは今後、上手くやつてこべと想ります。きっと古城での生活はより賑やかになつて楽しく過いでいると思ひます。

では、次回作もよろしかつたら読んでやつて下さー。一応、キリよく1~2月1日投稿開始予定です！詳しく述べ活動報告にてお知らせします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028o/>

古城に住む悪魔

2011年10月6日03時28分発行